

# 総合研究所報

第31号

令和4年10月

奈良大学総合研究所

BULLETIN OF RESEARCH INSTITUTE No.31 OCTOBER 2022

RESEARCH INSTITUTE OF NARA UNIVERSITY NARA, JAPAN





# 目 次

## ■科学研究費助成事業

最終年課題	基盤研究(A)	古代～中世の「鍬石」と「真鍬」の研究—金に等しい価値があったころ—	名誉教授	西山 要 一	2
	基盤研究(B)	現代山村の存立構造とレジリエンス—山村の持続可能性の追究—	文学部	岡 橋 秀 典	3
	基盤研究(C)	アジア系アメリカ演劇におけるアメラジアン(混血)性の研究	文学部	古 木 圭 子	4
	基盤研究(C)	対人コミュニケーションにおける配慮表現の地域差に関する研究	文学部	岸 江 信 介	5
	基盤研究(C)	秦漢以前に弥生文化に渡来した中国中原系絹織物の研究	文学部	小 林 青 樹	6
	基盤研究(C)	日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究	文学部	吉 川 敏 子	7
	基盤研究(B)	ハラム文書に含まれるペルシア語文書の解読と研究	文学部	川 本 正 知	8
	基盤研究(C)	新学習指導要領下における、高等学校国語の新しい古典教育研究	文学部	三 宅 晶 子	9
	基盤研究(C)	広島・長崎原爆による黒い雨・米核実験による放射性降下物の歴史的検証	文学部	高 橋 博 子	10
	基盤研究(C)	古墳時代における装飾付大刀の流通と氏族制に関する研究	文学部	豊 島 直 博	11
継続課題	基盤研究(C)	古代末期地中海世界の女性と個の発見	文学部	足 立 広 明	12
	基盤研究(C)	戦後日本における戦時上海邦人文芸文化ネットワークの移植と展開	文学部	木 田 隆 文	13
	基盤研究(C)	日本中世・近世都市郊外の開発とその歴史的過程に関する基礎的研究	文学部	河 内 将 芳	14
	基盤研究(C)	帝国日本における戦時輸送の地域間関係に関する研究	文学部	三 木 理 史	15
	基盤研究(C)	筋強直性ジストロフィーにおける疲労感の解明とヘルスケア行動改善プログラムの開発	社会学部	井 村 修	16
	基盤研究(C)	記述的規範の認知的過程に関する検討	社会学部	村 上 史 朗	17
	基盤研究(C)	高次表意と証拠性／意外性をめぐって	特別研究員 特命教授	内 田 聖 二	18
	基盤研究(C)	土木技術からみた古代日韓溜池の歴史的関係性	特別研究員	小山田 宏 一	19
	基盤研究(C)	北東アジア認識から見た19世紀末英米露政治思想の比較可能性に関する複合的研究	社会学部	竹 中 浩	20
	基盤研究(C)	泳いで周辺の島々に分布拡大するイノシシの実態解明と対応策	名誉教授	高 橋 春 成	21
	挑戦的研究(萌芽)	日本の森林政策に資する地籍問題の探索的研究	文学部	岡 橋 秀 典	22
	挑戦的研究(萌芽)	インドネシアにおける森林・原野火災危険度予報システムの構築	文学部	木 村 圭 司	23
	若 手 研 究	中世後期・近世前期日本語の清濁に対する共時的的研究	文学部	山 田 昇 平	24
	若 手 研 究	現在バイアス選好が公的年金政策に与える影響：経済成長・経済厚生観点から	社会学部	中 坊 勇 太	25
	若 手 研 究	曲亭馬琴の読本・合巻における演劇利用の研究	文学部	中 尾 和 昇	26
	国際共同研究強化(B)	3Dデータを利用した東アジアにおける文化遺産の保存と活用	文学部	今 津 節 生	27
	特別研究員奨励費	古代東アジアにおける彩色顔料の科学的研究	文学部	今 津 節 生	28

## ■奈良大学特別研究

奈良県山添村教育委員会との共同事業としての同村所在の歴史史料の調査と保全	文学部	河 内 将 芳	29
奈良県斑鳩町における古墳の調査研究	文学部	豊 島 直 博	30
奈良に関する資料のデジタルアーカイブの構築と活用	文学部	光 石 亜由美	31

## ■奈良大学総合研究所 令和3年度 活動録 33

### <公開講座>

奈良大学令和館講座	34/35
奈良大学と斎宮歴史博物館(三重県多気郡明和町)の連携公開講座	36
公益財団法人奈良市生涯学習財団(中部公民館)共催「夏の夜話2021」	36
公益財団法人奈良市生涯学習財団(西部公民館)・日本環境マネジメント株式会社共催 せいぶ市民カレッジ奈良大学文化講座	37

### <産学連携事業>

公益財団法人 古都飛鳥保存財団連携 イベント	37
近鉄文化サロン	38

### <地域連携>

地域臨床実践研究会 活動報告	39
----------------	----

## 古代～中世の「鍮石」と「真鍮」の研究 一金に等しい価値があったころー

研究期間：2018年4月1日～2022年3月31日

名誉教授 西山 要一

専門分野：保存科学、文化財学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(A)



### 【研究の背景】

銅と亜鉛の合金は、鍮石(ちゅうじゃく)、真鍮、黄銅と称され、古代には法隆寺や大安寺の『伽藍縁起並びに流記資材帳』に「鍮石香炉」の記録があり、近世には真鍮製の仏具、貨幣などが製造されました。近年まで、この間の中世に真鍮は存在しないと、中世の地層から出土した遺物が科学分析で真鍮製と判明すると後世の遺物が混ざったもの、社寺や博物館などの中世の様式や年号がある工芸品も真鍮製と判明すると後世の模作とされてきました。

西山らは2012年に奈良大学図書館所蔵の美福門院願經(紺紙金字經・平安時代)を科学分析し、金字が真鍮であることを発見して以来、鎌倉、室町時代の紺紙金字經にも、また、中世の美術工芸品にも真鍮製のあることを確認しました。

本研究は、日本の古代から近世に連綿と続く真鍮の歴史を明らかにする試みで、保存科学、美術工芸史学、考古学、史料学などの研究者・研究協力者25名により実施した学際的研究です。

### 【研究の成果】

(1)紺紙金字經の研究 分析を行った紺紙金字經62点の内31点の金字が真鍮泥で書かれています。三重・観音寺大宝院『鈔法蓮華經』八卷(平安時代)の銅と亜鉛の合金比はおおよそ80:20、関根俊一氏所蔵『妙法蓮華經卷第七』(平安時代中期～鎌倉時代)は82～86:18～14です。

1323年(至治三年)頃に中国・慶元(寧波)を出港して博多に向かう途上に韓国・新安沖で難破した「新安沈没船」の積荷「黄銅錠」の銅と亜鉛の合金比はおおよそ82:18です。このような真鍮インゴットが紺紙金字經の真鍮泥の素材として使われた可能性が高いと思われます。

(2)仏具の研究 長谷寺の九鈺鈴は13～14世紀の中国・元代の作とされ、鈴部は青銅製、把部は銅と亜鉛の比がおおよそ80:20の真鍮製です。愛知県・長暦寺の金剛鈴(五鈺鈴)3点は江戸時代の作で鈴部は青銅製、柄部は真鍮製で銅:亜鉛はおおよそ70:30と50:50です。鈴部は青銅ときめられていたようです。

(3)近世鑄造関連資料の研究 奈良町遺跡では炉跡と坩堝、鑄型、金属製品などが出土し、坩堝の内面から亜鉛が検出され、バウ(金属片)は銅と亜鉛の合金比が87:13の真鍮です。17世紀前半の真鍮工房跡です。平安京左京三条四坊十町跡から出土した亜鉛インゴットは96%の純度、真鍮インゴットは銅:亜鉛=71～79:29～21、炉蓋・羽口・坩堝からも銅と亜鉛を検出しました。17世紀後半の大規模な真鍮工房跡です。

(4)朝鮮半島の資料の研究 大和文華館の高麗時代の経筒では、筒部は銅:亜鉛=68～72:32～28、蓋と

台座は90～93:10～7で、筒部と、蓋・台座は異なる真鍮素材で造られていました。また、同館の高麗時代の鉄製雲龍文象嵌笛では、赤色の象嵌線は銅:亜鉛=76:24の真鍮、白色の象嵌線は銀であることが分かりました。

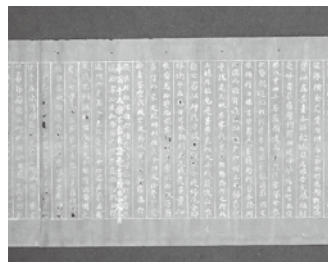
(5)真鍮関連史料の研究 朝鮮・新羅の『三国史記』卷三十三に骨品制の位階ごとに使用を定める金属として「鍮石」「鍮」の記載を見出し、これら真鍮製品は舶載の真鍮インゴットを利用した新羅製であることを考察しました。また、「鍮石」は天然合金、「真鍮」は人工合金とする説について、真鍮の天然合金はあり得ず、古代ローマの真鍮コインに見るように紀元1世紀に既に銅・亜鉛合金技術は確立されています。「鍮石」「真鍮」の解釈を検討すべきと提言しました。

(6)真鍮の鑄造実験 鑄造実験では、銅と亜鉛の合金比を95:5、90:10…のように5%ずつ変化させて10種のサンプルを作成しどのように色変化するかを見ました。その結果、目視で金色に近いのは銅:亜鉛=85:15と80:20で、色彩計による科学測定でも同じ結果でした。

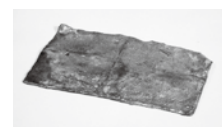
本研究の成果をまとめると、1日本の中世にも真鍮製品のあることを科学分析で明らかにし、新たに真鍮史を書き替えました。2日本の古代～中世の真鍮製品は朝鮮半島や中国からの輸入品です。3紺紙金字經の真鍮泥は中国から輸入した真鍮インゴットを加工したもので、日本独自の真鍮利用法と思われます。4近世初頭には、ヨーロッパや中国から亜鉛を輸入して国産銅と合金し真鍮製品を製造しました。5朝鮮半島では、三国時代、高麗時代、李朝の資料の分析から、古代～近世の朝鮮真鍮史の概要が分かりました。6「鍮石」は天然合金、「真鍮」は人工合金とする説を史料や文献から再検討し、紀元前に既に合金技術が確立されていたことを論じました。

### 【今後の計画(または展望)】

2021年度で4年間の研究を終了しましたが、2022年度より新たに『黄銅(鍮石・真鍮)の歴史とその伝来の道「Brass Road」の研究』(基盤研究(A)(一般))として2025年まで継続します。日本、朝鮮半島、中国の真鍮関連資料の探索と科学分析を行って真鍮製品のデータを収集するとともに、中央アジア、西アジア、そしてヨーロッパにも調査を展開し、「真鍮の世界史」の構築を目指します。



関根俊一氏所蔵妙法蓮華經卷第七  
(金字が真鍮で書かれている)



韓国・新安沈没船発見の  
真鍮インゴット



## 現代山村の存立構造とレジリエンス ―山村の持続可能性の追究

研究期間：2018年4月1日～2022年3月31日

文学部 地理学科 教授 岡 橋 秀 典

専門分野：人文地理学、農村地理学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(B)



### 【研究の背景】

日本の山村地域は、2000年代以降、グローバル化や構造改革にとともに、その存立構造が大きく変動し、山村の将来像について持続可能性の観点から熟考すべき時期にきている。本研究は、これまで研究分担者らが蓄積してきた研究成果を基に、日本の山村の存立構造の変動と持続的地域対応力(レジリエンス)について究明し、今後の日本の山村社会のあり方を展望しようとするものである。

### 【研究の成果】

2021年度は、最終年度であるためレジリエンスに力点を置いた研究を進めるとともに、成果の取りまとめ作業を行なった。特に出版を念頭に置き目次案に沿った総括作業を進めた。

山村の存立構造の変動とそのメカニズムの把握については、新たな中心周辺構造の形成と、それに対抗する動きを軸に以下の①～③の3つの側面から研究を進めた。①山村の自然生態系に依拠する産業である農林業を対象として、労働力・土地・資本の側面から存立構造を検討した。山村でも「企業の農業参入」が見られるが、特に「植物工場」に注目し、その立地パターンを全国スケールで検討した。また、山梨県や大分県など農業参入企業が多く立地する地域を取り上げて、企業の進出が耕作放棄地の活用など農村地域の土地利用にどのような影響を与えるのかについて検証を行い、その問題点を指摘した。耕作放棄が進む山村の農地保全について、中山間地域等直接支払制度の活用実態から考察を進め、その成果と限界を明らかにした。林業については、近年成長産業として経済的な利用が推進されるが、それが従来の林業の地域構造をどのように変えているか検討した。②新たな産業の存立構造については、山村では6次産業、介護サービス産業、環境再生型エネルギー産業などの新たな産業部門の展開がみられるが、特に、林業における6次産業化に焦点を当てて分析し、吉野郡川上村でも十津川村でもそのような動きと成果がみられることを確認した。③政治社会の存立構造については、平成大合併による政治的自律性の変化、地域社会の対応力の変化、移住者や新たなアクターによる社会システムについて考察し、周辺化の進行とそれに対抗する自律と自立の動きについて検討した。地域運営組織については、地域住民にとって集落は引き続き合意形成の単位として持続する一方で、課題解決においては地域運営組織による活動が有効である

ことを指摘した。また、中山間地域社会の伝統的な社会的結節点となってきた寺院の存立基盤については、住職とその家族に注目して研究を進め、地域社会におけるレジリエンスの基盤を構成した寺院の存続が危ぶまれていることを明らかにした。移住者については、群馬県内の移住者の多い2つの山村において、移住者の移住目的や将来についてアンケートを実施し、ほとんどの移住者は、移住地域での土地や農地の所有に否定的であることを明らかにした。最後に、山村住民のモビリティについて、高知県および徳島県において、生活交通に関する住民アンケート調査を実施し、住民のモビリティ状況、モビリティや生活の満足度、バス交通に対する意識等を把握した。

### 【今後の計画（または展望）】

上述の共同研究の成果を出版するための原稿の取りまとめと編集作業を行う予定である。さらに本研究の成果を地域づくりの現場にフィードバックする作業も進めていきたい。



写真 1 川上村に建設された大滝ダム

2012年供用開始。村の中心部がダム開発により水没したため、村に多大な影響を与えた。



写真 2 「吉野かわかみ社中」の刊行物

川上村では、近年地域振興に向けた様々な取り組みが見られる。「吉野かわかみ社中」もその一つで、林業の6次産業化を核として林業・木材業の活性化に取り組んでいる。写真一番左の吉野林業に関する刊行物は、吉野林業の伝統、現状と課題、今後の展望までを丁寧に記述した貴重な資料である。



## アジア系アメリカ演劇におけるアメラジアン（混血）性の研究

研究期間：2018年4月1日～2022年3月31日

文学部 国文学科 教授 古木 圭子

専門分野：アメリカ演劇、アジア系アメリカ文学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

本研究における第一の問いは、「アメラジアン」（アジア人とアメリカ人の混血）という用語が示す人種・民族・文化的定義と、その人びとの社会的立場に関するものであった。1960年代後半のアジア系アメリカ人運動の台頭以来、アジア系アメリカ人は各エスニシティの文化、伝統、コミュニティに基づく政治性を主張してきた。一方、1990年代以降の異人種間結婚の急激な増加により誕生した混血の人びとは、人種混合の理想を謳うアメリカの新たな「顔」とされる一方、人種の分類の明確化を余儀なくする社会において孤立することもある。そのような矛盾を抱える彼らの歴史と現況を探ることは、アメリカ文学における人種問題を再考し、アメリカ文学および演劇研究に新たな視座を提供すると思った。

みずからをアメラジアンと称する劇作家Velina Hasu Houston (1957-) の活躍はめざましく、戦争花嫁の視点を中心に日系家族を描いた三部作 *Asa Ga Kimashita* (1981)、*American Dreams* (1984)、*Tea* (1987) を始めとして、家族関係における人種、ジェンダー、異文化の衝突などの問題提起を行っている。彼女の戯曲と声明に触れることは、アジア系という表現が異文化受容の性質を有することが自明だとする研究動向を再考するきっかけとなるものである。

### 【研究の成果】

本研究では、アメリカにおける混血人種の研究史を踏まえ、Houstonの戯曲研究、ハワイのローカル演劇、1965年に設立されたEast West Playersの創立から現在までの状況、Chiori Miyagawa (1961-) などのアジア系アメリカ人劇作家の戯曲についての調査を進め、現在のアメリカにおけるエスニック演劇が、ある一定の人種・民族、国境を超越する「トランスボーダー」の要素を有することを明らかにした。主たる研究成果としては、2018年に *AALA Journal* (アジア系アメリカ文学会) に発表した論文「ヴェリナ・ハス・ヒューストンの戯曲にみるアメラジアン（混血）性と家族像——*A Spot of Bother* を中心に」を始めとして、「チオリ・ミヤガワの戯曲にみる暴力、ジェンダー、家族解体——『女殺し』を中心に」（『アメリカ演劇』28・29号、2018）、「チオリ・ミヤガワの描く幽玄の世界——*This Lingering Life* を中心に」（*AALA*

*Journal* 23, 2020）、共著書『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』（金星堂、2018）、共著書『回帰する英米文学—時代を生き抜く＜学び＞とは』（大阪教育図書、2021）、共編著『アジア系トランスボーダー文学 アジア系アメリカ文学研究の新地平』（小鳥遊書房、2021）がある。

### 【今後の計画（または展望）】

アメリカ演劇における混血研究を進めてゆくことは、Tennessee Williams (1911-83)、Arthur Miller (1914-2005) などの戯曲における移民や人種の問題を再考し、アメリカ演劇史の流れを捉えなおすきっかけとなる。これらのいわゆる「メインストリーム」のアメリカ劇作家による人種問題の扱いについては、先行研究において十分論じられてきているとは言い難いので、今後はマイノリティ演劇からメインストリームの演劇に至る人種問題について考察を深めたい。

さらに2022年度からは、基盤研究C「アメリカ演劇におけるキャンブとパロディの要素についての研究」において、Williams やEdward Albee (1928-2016) の戯曲における女性主人公に関する考察を通して、アメリカ演劇におけるキャンブおよびパロディの要素とセクシュアリティ、ジェンダーの関係について研究を進めたい。



ハワイのクム・カファ・シアター  
(二〇一九年 三月二五日 撮影)



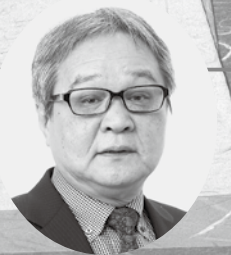
# 対人コミュニケーションにおける配慮表現の地域差に関する研究

研究期間：2018年4月1日～2022年3月31日

文学部 国文学科 教授 岸 江 信 介

専門分野：国語学、方言学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



## 【研究の背景】

言語行為そのものがどのように組み立てられているかに着目し、配慮表現の地域差や世代差について全国調査を実施した。その中から「断り」に関する調査結果についてみることにしたい。

言語行為の中の「断り」を構成する要素をパターン化することが可能である。「断り」に入る前の「前置き」「謝罪」のほか、断るための「理由」は大半の回答にみられる。また、直接「その日は行けない」とか「その日は都合が悪い」といった「不可能」の表明や、相手の意向に沿えるように振る舞いたいという「共感」、その日は協力できないが別の日なら手伝えるといった「代案」の提示なども、多く見受けられる。このように「断り」の発話行為そのものの構造を「前置き」「理由」「謝罪」「不可能」「共感」「代案」などの意味公式のレッテルを貼り、「断り」の発話行為の構造がどのようになっているかを把握した上で分析することも可能である。以下では、前置きや謝罪といった表現があるか否か、謝罪が先かあるいは理由が先か、手伝いに行けない（不可能）ことに言及しているかどうかなど、「断り」の回答を吟味し、場面差・世代差・地域差（東西差）がどうなっているか、分析した。

## 【研究の成果】

このうち、「断る」という発話行為において「謝罪が先か理由が先か」といった視点から調査結果を分析した。発話行為では「謝罪」を先に言うか、それ

謝罪表現の回答形式の傾向—地域差を探る—



図3 中高年層：目下に対する謝罪表現「すまない」VS「申し訳ない」

とも「理由」から先に言うか、どちらを優先するか、検討する。

図1・図2は目上と目下で差が生じるかどうか、場面差をみたものである。まず、図1の中高年層の回答では目上の場合も目下の場合も「謝罪」を先に述べるのが多いが、目上に対する場合、「謝罪」が70%をこえており、目下との間に有意差がある ( $P<0.01$ )。また大学生の場合は目上・目下に対し、「謝罪」がともに80%をはるかにこえており、しかも中高年層とは異なり、目下に対して「謝罪」が多くなっている ( $p<0.01$ )。特に目下に対して「謝罪」が多い理由として、大学生では全国的に「ごめん」類の謝罪形式が使われるためだと考えられる。「断り」の発話行為には謝罪表現が多くみられる（図1、図2参照）。今回の調査を通じ、謝罪表現の地理的変異と世代変化が明らかになった。ほんの一例にすぎないが、中高年層の表現形式には地理的な分布対立（図3：「すまない」VS「申し訳ない」）を示すものが多々みられる。いずれも全国共通語と思われる表現形式であるが、東西型の分布を示すものもあり、興味深い。

## 【今後の計画（または展望）】

方言学の研究では、例えば方言語彙や文法形式など方言形式の変種を対象にした地域差の研究が主であった。発話行為の地域差とか言語外の諸要素、換言するなら言語の運用面での地域差であるとか、文化的背景の相違による慣習上の違いや言語行動様式の差異などについて昨今注目が集まっており、方言研究の新たな分野として配慮表現の研究が盛んとなっている。

今回の配慮表現の全国調査を皮切りに言語行動の地域差をさらに深く究明すべく、対人配慮という視点から地域差の解明を目指したい。

## 【引用文献】

- ① 岸江信介・中井精一編（2022）『地図で読み解く関西のことば』昭和堂。
- ② 岸江信介（2021）「断りにみる配慮表現の動向」『表現研究』第114号、28-37。
- ③ 岸江信介（2018）「断り」という言語行動にみられる特徴」『コミュニケーションの方言学』、95-114、ひつじ書房。

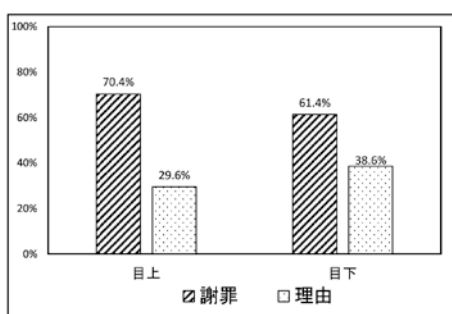


図1 中高年層：謝罪が先か理由が先か

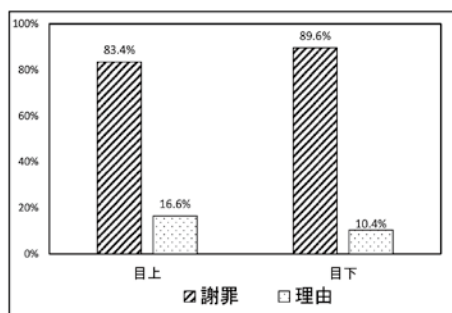


図2 大学生：謝罪が先か理由が先か



## 秦漢以前に弥生文化に渡来した中国中原系絹織物の研究

研究期間：2018年4月1日～2022年3月31日

文学部 文化財学科 教授 小林 青 樹

専門分野：東アジア考古学、考古学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

これまで、弥生時代中期前半の北部九州を中心とする遺跡から出土した絹製品については、漢代以降のものであり、中国中原、すなわち漢代のものに近く、すでに国内での生産も考えられていた。しかし、2003年以降に国立歴史民俗博物館による新しい弥生時代の年代が再検討されて以降、ここで問題となる弥生時代中期初頭の年代は、前370年から350年頃、遅くとも前4世紀代頃となり、それまで秦漢時代のものと考えていた仮説はすべて見直しが必要となった。そして、この新しい年代観に基づいた絹製品をはじめとした布製品の検討を行うこととなった。

### 【研究の成果】

本年度は、最終年度であり、昨年度に引き続きコロナ禍の影響によって紡錘車と布目圧痕土器を分析検討した。はじめに、南関東における絹に比肩する細密な織り密度を有する布目圧痕と考えられる土器、そして紡錘車と弥生時代の機織り機である輪状機、といった布生産に関わるものが弥生時代中期中葉から後半に出現する点に注目した。中里遺跡からは、同時期の近畿地方の弥生時代中期中葉、第Ⅲ様式に比定されている土器群が多数出土している。したがって、布生産の変革が近畿弥生文化の影響によるものである可能性は高い。ただし、布目圧痕土器の存在は、すでに東海地域の近畿第Ⅱ様式併行の貝田町式段階から認められるので、第Ⅱ様式段階に、近畿地域から東海の影響があった。しかし、中里遺跡における近畿系土器の多量出土は無視できない。そこで、本研究では、南関東の布目圧痕土器と紡錘車の検討を進めると同時に、西日本における布目圧痕土器と紡錘車の動向にも目を向けることとなった。

まず弥生時代中期の近畿中枢である大和盆地（奈良県）の紡錘車の集成作業を実施した。その結果、唐古・鍵遺跡など当地域内の諸遺跡において、近畿第Ⅲ様式段階での紡錘車の出土点数が急増することが明らかとなり、南関東の中里遺跡での紡錘車の出現と連動した現象であると考えられるに至った。この現象は近畿一帯でも同様であることを確認した。そして、こうした紡錘車の急増は大局的には中期前半からはじまり、燕下遺跡の紡錘車の分析により、本研究で当初注目した燕国の影響によると考える中期初頭から前半の絹製品の流入時期とも関係する。すなわち、中期以降の紡錘車の急増と東方への拡散は絹製品の流入する現象と連動した可能性を考えた。

布目圧痕土器については、神奈川県王子ノ台

遺跡と子ノ神遺跡において観察と計測・分析を行った。分析はマイクロスコプでの微細な観察と、シリコンのレプシカの採取による電子顕微鏡（SEM）での観察作業である。これらにより、布目圧痕の糸の素材や織り方、そして織り密度の分析を行った。両遺跡では、1 cmあたり30本程度の高密度な平織の布が存在することが明らかとなったが、今回の布目圧痕のレプリカの検討では、絹の可能性までは確認できず、ほぼ同時期の他の遺跡では同じ密度に近い麻などの布の実物が出土しており、そうした類例のなかで考えるべきであろう。なお、織り密度とは、1 cmの中に何本の糸が入るのかを経緯それぞれで計測することにより導き出す手法である。この経糸と緯糸の対1 cmの織り密度の記述は、たとえば25（経糸）×10（緯糸）のように示される。細密な麻布の存在について検討を行った布目順郎氏によれば、日本列島の麻布の織り密度は、平均でみると弥生時代前期に細かく、織り密度は21.7×13.7で、中期には16.1×9.0、後期には17.7×9.1であり、中期初頭の唐古・鍵遺跡では平均25.8×16.2と同時期では織り密度が高く、30×16という非常に織り密度の高いものがあることを指摘している。そして布目氏は、こうした布について「織り密度の高い布は高級品として扱われたから、出土の布も高級品に相違ない」とした。こうした例からみて、今回の布目圧痕の分析結果のうち高密度な平織は絹とほぼ同等の製品とみることができる。

以上の紡錘車と布目圧痕土器の分析結果から、中国戦国時代に燕国から弥生文化に布生産に関する技術が流入し、衣服の面で画期を迎えたことが明らかとなった。

### 【今後の計画（または展望）】

今回の紡錘車の検討は、奈良県と南関東という弥生時代の列島の一部に過ぎない。今後は、列島規模での紡錘車の網羅的な集成作業により、都道府県レベルでの地域間関係などを分析できるであろう。また、布目圧痕土器については、唐古・鍵遺跡のような織り密度が30×16という高い類例については、唐古・鍵遺跡の中期初頭を遡るものはほとんどない。したがって、弥生時代中期初頭に列島に絹製品とともに細密な布を織る技術が伝わり、かつ倭人が同時期に大陸から伝わった平絹に織り密度を近づけようとした結果生まれたものである可能性が高い。しかし、実物資料の数は圧倒的に少なく、絹が麻布に与えた影響は今後の課題である。



## 日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究

研究期間：2018年4月1日～2022年3月31日

文学部 文化財学科 教授 吉川 敏子

専門分野：日本古代文献史学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

近畿の古代牧は、馬の大消費地であった都の近くに所在して政治経済・軍事・交通・文化に重大な影響を与えながらも、研究が立ち後れてきた。このような状況に対し、都への供給を担う地方の牧と、受け皿となる都周辺の牧とを対比し、後者についての文献史学・考古学・地理学の研究者による学際的共同研究を目指した。畿内・近国の牧については、遺跡の分かりづらさや史料の希薄さなどの障壁はあるものの、断片的ながら古代牧の名が史料に残されており、その痕跡は各地に残っているはずである。文献史料や地理的条件から得られる情報を加えることで、性格未詳とされてきた検出遺構の中から、牧の関連遺構を抽出できる可能性もある。遺跡を特定し、牧の実態を復元することで、文献に現れる畿内・近国の牧の歴史的意義を、より具体的に論じるための、研究基盤の構築を目指した。

### 【研究の成果】

2019年度までの研究では、文献史料を博搜して作成した畿内・近国の古代牧のリストを元に、積極的に古代牧推定地を現地踏査した。近畿古代牧の特徴を相対的に検討するために、東国・南九州の古代牧推定地の巡見も行った。同年度までに踏査を行った近畿古代牧推定地は、大和国室原牧（仮称。奈良県田原本町）、摂津国豊島牧（大阪府箕面市）、大和国宇陀肥伊牧（奈良県宇陀市）、河内国坂門牧（大阪府柏原市）、伊賀国広瀬牧・薦生牧（三重県名張市）などである。また、遠隔地の古代牧所在地では、山梨県（北杜市・南アルプス市等）、宮崎県（串間市都井岬）・鹿児島（志布志市・始良市等）、群馬県（渋川市・安中市等）、長野県（佐久市・東御市等）を巡見した。各地の古代牧推定地の踏査では、現地の研究者にご協力をいただいて、地域ごとの牧の特質を最新の情報を踏まえて観察でき、これにより近畿の牧を相対的に理解することが可能となった。この他、韓国（釜山・蔚山・ソウル等）の前近代の牧の伝承地を巡見した。

2020年度は、研究助成の最終年度として、研究成果を整理・総括し、報告書の作成に取り組んだが、コロナウィルス蔓延の影響を受けて遅延し、2021年度に研究成果報告書を刊行した。その書誌と構成は以下である。

『日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究

（課題番号 18K00979）平成30年度～令和2年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書』（研究代表者 吉川敏子 2021年10月）

吉川敏子「日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究」

「近畿古代牧変遷の概観 付：近畿古代牧リスト（稿）」

鷲森浩幸「大和国西部の牧と馬」

吉川真司「河内国楠葉牧の再検討」

佐藤健太郎「鳥養牧について」

山中章「布施内親王墾田地から東寺垂水庄・垂水牧へ～条里型地割形成前後の摂津国垂水牧～」

本研究では、古代の牧を、馬を生産・放牧する生産牧と、官司や貴族が当面利用しない馬を放牧する備蓄牧とに区分し、王権膝下の近畿における後者の重要性を指摘した。近畿の馬牧は、都に収容しきれない貢上馬を放牧し、需給の調整弁とする小規模な備蓄牧として機能した。生産牧と備蓄牧の性格の違いを明確にし、馬の生産・運用・利用についてのモデルを提示できたことは、近畿古代牧に限らず日本古代牧研究における成果であったと考える。遠国の大規模な生産牧と近畿の小規模な備蓄牧による馬の運用は、公的な牧のみならず私牧においてもなされ、8世紀には行われていたことを、史料や平城京木簡などから指摘した。また、軍団制の設置・停止など軍事的需要の高低により、畿内にも生産牧が置かれ、やがては廃止されるなどの変遷があった可能性を示した。現地踏査を踏まえて大和国宇陀郡肥伊牧、摂津国豊島郡豊島牧、河内国大県郡坂門牧、同国若江郡辛嶋牧など、複数の近畿古代牧の現地比定を行ったことも成果である。未だ仮説の域を出ないが、今後、各比定地周辺において発掘調査などが行われる際には、牧の可能性も意識しつつ調査がなされることで、その痕跡が検出されることを期待したい。

### 【今後の計画（または展望）】

これまでの研究で見出した研究方法を用い、畿内周縁地域の古代牧に重心を移して研究を継続する。遠国の生産牧と都周辺の備蓄牧とは別に、畿内と遠国との境界に位置する中継牧などの区分を想定し、その推定地への踏査を踏まえて検討していく。



## ハラム文書に含まれるペルシア語文書の解読と研究

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

文学部 史学科 教授 川 本 正 知

専門分野：西アジア・中央アジア史

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(B)



### 【研究の背景】

イスラエルのイエルサレムの城壁に囲まれた旧市内の東側は日本では「神殿の丘」と訳されるハラムとよばれる高台の地区となっている。このハラムにある十字軍時代に建てられたとされる建物のIslamic Museumにおいて、1970年代に13～14世紀に書かれた900点ほどの文書からなる「ハラム文書」とよばれる文書群が発見された。文書のほとんどがイエルサレムで書かれたアラビア語の文書であったので、その中に含まれていた28点のペルシア語の文書の存在はほとんど知られておらず、研究も行われていない。また、その中の14点のアラビア語の文書は、28点のペルシア語文書とイラン北部の地名、人名、文書形式、発行年代が共通し、両者は他の文書とは別の一つの文書群をなしている。当研究は、これら42点の文書を解読し、テキストを作成し、翻訳し、訳注をつけることを第一の目的とする。次にそれを既知の文書や既刊の文書集と比較・対照し、その結果をもとに国内外の文書研究者と議論し、それらの文書の資料的価値を決定する。これら一連の作業の後、得られた研究成果を解説を付した資料集として出版し、従来不十分であった13-14世紀モンゴル支配時代イランの社会史研究の基礎的資料とする。

### 【研究の成果】

当科学研究は2021年4月に始まった。文書を読解していくためには東洋文庫所蔵の2000枚ほどのハラム文書写真のマイクロフィルムから、この科研で読んで行く予定のPersian文書とPersianate文書42点を選び出し焼き付けて研究分担者全員が共有することになっていた。このためには研究代表者が4月に東洋文庫を訪れて写真を選定してその焼き付けを申請する予定だった。しかし、幸いなことに2021年1月に東洋文庫が所有するマイクロフィルムの元の写真のPDFが、そのオリジナルの所有者のカナダのMcGill Institute of Islamic Studiesからオンライン上にアップされた。それをダウンロードし、PDFの写真全てをJPEGに変換し、全員が共有するクラウドのDropboxの共有ファイルに収納して全てのハラム文書写真を全員が共有した。

2021年7月から8月にかけて、3週間奈良大学の大学院生1名を雇用してデータベースソフトFile Maker Pro2に、Donald P. Littleによるカタログ(Beirut, 1984)情報とともに全ハラム文書のJPEGを貼り付け、ハラム文書データベースを完

成させることができた。

2021年9月以降、Dropboxの共有ファイル中のJPEGをつかって月一回のペースでZoomによる研究会をひらいて文書を読み進め、現在まで予定の42点の文書中Persian 7点、Persianate 3点を解読した。

2021年5月に、Zoomによる研究会において研究分担者の伊藤隆郎博士にChristian Muller, *Der Kadi und seine Zeugen*, Wiesbaden, 2013の内容を詳細に紹介してもらった。

2021年6月24日に、Konrad Hirschler博士を長とするドイツのハラム文書を研究する3人と当研究会8人でシンポジウムをおこない、今後の研究協力について協議した。

### 【今後の計画（または展望）】

2022年度は、当初の計画通り、9月初旬にイエルサレムのIslamic Museumを研究分担者数人で訪ね、ハラム文書の原文書の調査をおこなう。可能であれば全文書のデジタルデータを取得する。

それ以外は昨年通り月1度Zoomによる研究会をおこない、文書の解読をすすめる。現在、解読に用いている写真は1970年代に撮られたモノクロ写真なので解読が難しい。今年度の調査において取得するカラー写真により解読がより容易になること期待されている。9月調査が終了した後、コロナ禍が終息し対面の会合が可能になっていれば10月中または11月に科研メンバー全員でハラム文書調査報告会を開き、その時点までの研究成果をまとめる。

2023年度は、9月に上記のドイツの研究者たちとドイツでワークショップを開く予定。



ハラムとよばれる「神殿の丘」を南から見た写真。手前のドームがアクサー・モスク、後ろの金色のドームが「岩のドーム」。ハラム文書はアクサー・モスクの西側に接するIslamic Museumで発見された。



## 新学習指導要領下における、高等学校国語の新しい古典教育研究

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

文学部 国文学科 教授 三宅晶子

専門分野：日本古典文学、教育学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

高等学校の学習指導要領が改訂され、2022年度から施行されている。「言語文化」の教科書が22年度から使用開始、「古典探求」は各校選定中で、来年度から使用される。日本学術会議 言語・文学委員会 古典文化と言語分科会のメンバーとして、2020年に「高校国語教育改善に向けて」という提言を発表した。古典教育に関しての部分を担当した経験を活かし、新学習指導要領下において、どのような古典教育が必要で、どのような教科書が望ましいのかについて、調査・考察していきたい。

2009～2011、2012～2014、2016～2018年度の科学研究費基盤研究(C)で、小・中・高の学校教員に必要な「古典力」(日本の古文・漢文の読解力、日本の歴史・文化・生活習慣全般にわたる古典に対する知識・能力)育成のための教育開発研究を行った。その成果を継承発展させるものである。

### 【研究の成果】

初年度の2021年度は、コロナ禍で十分な活動ができなかった。また新学習指導要領に基づく新教科書は、「言語文化」が検定を終了し、各校で選定の年度であったので、まだ研究室に常備することができておらず、その意味では十分な調査に至っていない。

ただし、奈良大学附属高等学校のご厚意によって、全教科書を閲覧させていただくことができた。それによって、基本となる網羅的な調査が完了し、その結果をまとめて、奈良大学国語教育研究会において、公表することができた。また「言語文化教育への挑戦－繰り返し学ぶ『枕草子』「春はあけぼの」－」(『横浜国大国語研究』40号)として論考をまとめることができた。

### 【今後の計画(または展望)】

2022年度は、「言語文化」の全教科書と、占有率上位5種の指導書を購入して精査し、傾向と対策をまとめたい。「古典探求」は昨年度同様附属校のご厚意で教科書を調査させていただき、網羅的な基礎調査を行いたい。2023年度には「古典探求」の全教科書と占有率上位5種の指導書を購入して精査し、傾向と対策をまとめたい。

また、古典教育のネックとなっている文法教育に関して、テキスト収集を継続的に実施し、現在行われている文法教育のあり方を把握し、改善策を模索したい。

もう一つの柱として能・狂言などの古典芸能の魅力的な教育法の提案がある。長年テキスト作りを手がけているが、それを完成させたいと考えている。

## 広島・長崎原爆による黒い雨・米核実験による放射性降下物の歴史的検証

研究期間：2021年4月1日～2025年3月31日

文学部 史学科 教授 高橋 博子

専門分野：アメリカ史、グローバルヒバクシャ研究

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

広島・長崎の被爆者、米核実験によって被ばくしたマーシャル諸島の人たち、また旧ソ連による核実験の被災者たち、さらにはそのほかの核実験実施国による多くの被災者は、核軍備拡張の競争の中で、国家安全保障上の理由によって隠されてきた。本研究の目的は、米ソ冷戦を、隠されてきた核被災者の視点から分析しなおすことである。

### 【研究の成果】

2021年度はオンラインでの企画や日本国内での調査が中心であったが、この目的をかなり達成できた。研究代表者の高橋博子は2022年3月には Bensaude-Vincent, Bernadette Boudia, Soraya, Sato, Kyoko, eds., *Living in a Nuclear World: From Fukushima to Hiroshima* [核の世界に生きる：フクシマからヒロシマへ] に“10. Continuing Nuclear Tests and Ending Fish Inspections: Politics, Science, and the Lucky Dragon Incident in 1954,” と題して論文を寄稿した。またNHKスペシャル『原爆初動調査：隠された初期被曝』（8月9日放送）に協力し、研究成果をより社会に還元することができた。

研究分担者の桐谷多恵子は日本平和学会グローバルヒバクシャ分科会共同責任者として春季研究大会にて「アメリカと核被害—ジェンダーと先住民の視点を踏まえて」をテーマとした企画を実施した。アメリカのシカゴから宮本ゆき氏（デューポール大学）が「アブセント・ナラティブ：アメリカと日本の核論説」と題して、東京から石山徳子氏（明治大学）が「アメリカ核開発と「犠牲区域」の地理学分析；先住民研究との接点を探る」と題して報告した。

研究分担者の竹峰誠一郎は日本平和学会秋季集会グローバルヒバクシャ分科会にて「世界の被ばく者援護制度：カザフスタンとフランスの事例から」をテーマにした企画で司会を務め、世界の核被災者援護とその中での核兵器禁止条約の意義と可能性について示唆した。

また日本バグウォッシュ会議と共催した「気象学者の約束（Pledge）：黒い雨」では、気象学者の増田善信氏と毎日新聞の小山美沙氏を招いて、オンラインにて講演会を開催でき、2021年7月14

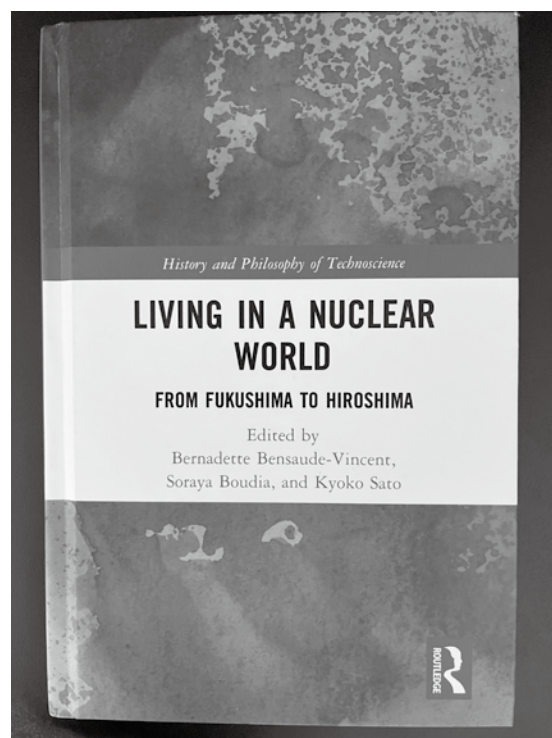
日の広島高裁での黒い雨訴訟の判決を踏まえた、時期にかなった企画を実施できた。

### 【今後の計画（または展望）】

2022年度は米国立公文書館での調査など海外調査を予定しているが、新型コロナウイルス感染状況によっては、国内での調査やオンラインでの研究会・講演会を優先する可能性がある。

日本平和学会2022年度春季研究集会グローバルヒバクシャ分科会にて、3月に出版した *Living in a Nuclear World: From Fukushima to Hiroshima* の編者の佐藤恭子氏（スタンフォード大学）が報告、ノーマ・フィールド氏（シカゴ大学）が討論、高橋博子が司会を務める予定である。

また海外での調査が可能になり次第実施するが、すでに核兵器禁止条約締約国会議や核不拡散禁止条約に関連した、世界の核被災者に焦点を当てた会議・研究会・講演会の企画が充実しており、その多くに本科研メンバーが関わっている。研究成果の発表や研究調査のために、積極的にオンラインイベントに関わってゆきたい。





## 古墳時代における装飾付大刀の流通と氏族制に関する研究

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

文学部 文化財学科 教授 豊島直博

専門分野：考古学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

日本の後期古墳からは、金や銀で表面を飾る装飾付大刀がしばしば出土する。それらは把頭の形によって単龍環頭大刀、双龍環頭大刀、獅嚙環頭大刀、頭椎大刀、圭頭大刀、円頭大刀などに大別され、器種ごとに分類と編年が行われてきた。多様な装飾付大刀が併存する理由として、畿内の有力豪族が個別に生産と流通に関与したという説がある。例えば、双龍環頭大刀は蘇我氏、頭椎大刀は物部氏と関係が深いという見解がある。また、装飾付大刀は7世紀初頭に一斉に消滅し、方頭大刀に統一される。その背景には、推古朝に官位制が導入され、大刀による身分表示が廃止されたという意見がある。このように、装飾付大刀は日本の古代国家形成を解明するうえで重要な遺物である。

本研究の目的は、装飾付大刀の生産と流通の実態を解明し、日本の古代国家形成論を発展させることである。従来の国家形成論を発展させるには、律令制の完成をもって国家の成立とみなす伝統的な国家論も視野に入れ、「初期国家」から「国家」への変化を検討する視点が有効である。これまでの研究では、双龍環頭大刀と頭椎大刀の生産に蘇我氏と物部氏が関わったことを指摘した。いっぽう、装飾付大刀の消滅後に現れる方頭大刀が飛鳥の官営工房で生産され、国家の軍事政策に基づいて東日本に流通したと主張した。つまり、7世紀後半には豪族による武器生産が衰退し、国家主導の生産に転換する。さらに他の装飾付大刀の分析を加えれば、豪族による武器生産が淘汰され、国家による生産体制が完成する過程が解明でき、武器の生産と流通から国家形成を見直す展望が開ける。

### 【研究の成果】

本研究では、圭頭大刀、円頭大刀の分類と編年に取り組んでいる。圭頭大刀については、東京国立博物館、群馬県立歴史博物館、高崎市観音塚考古資料館、東北歴史博物館など多くの博物館において実物資料の実測と写真撮影を行った。その結果、圭頭大刀は8型式に分類でき、3段階に編年できることが明らかになった。また、編年を踏まえて時期別分布図を作成した。初期の資料は韓国南部から北部九州、山陰を経て畿内に流入し、東海から関東地方、さらに東北南部まで流通することが明らかになった。また、中期段階の資料は流通経路に大きな変化はないが、各地域における出土量が増加し、分布が濃密になる。さらに、後期

段階の資料は四国北部や山陽地域にも分布するようになり、新たな流通経路が開拓されることが判明した。

初期の圭頭大刀は百済にも分布し、系譜は百済の武器に求められる。また、圭頭大刀の意匠の細部に着目すると、法隆寺に伝世する仏教美術品との共通点が窺える。ゆえに、圭頭大刀の生産主体として厩戸皇子を中心とする上宮王家が想定できる。圭頭大刀の分布からは上宮王家による地方支配の進展を読み取ることができる。今後は、上宮王家の部民である壬生部の分布や、法隆寺式軒瓦の分布と比較検討する必要がある。以上の内容については、現在、雑誌に投稿する論文を執筆中である。

いっぽう、円頭大刀については九州歴史資料館、かすみがうら市歴史博物館などにおいて実物資料の実測と写真撮影を行った。現時点では、①把頭に花形飾金具をもつ段階、②銀製把頭をもつ段階、③金銅製把頭をもち、鞘に飾金具を使用しない段階、④金銅製把頭をもち、鞘に飾金具を用いる段階に編年できると考えている。また、分布域は圭頭大刀よりも狭いという感触を得ている。円頭大刀については今後も資料調査を継続する予定である。

### 【今後の計画（または展望）】

今年度は円頭大刀の資料調査を継続する予定である。具体的には、東京国立博物館の収蔵品、島根県上塩冶築山古墳出土品（出雲市立歴史博物館）、新坂1号墳出土品（千葉県立中央博物館）などの実物資料の実測と写真撮影を行う予定である。円頭大刀には鉄地銀象嵌の把頭をもつものが多い。それらは心葉形や渦巻文を象嵌しており、これまで行ってきた手作業の実測が難しい。そこで、象嵌をもつ円頭大刀については、写真撮影ののち、現地で実物を観察しながらデジタルトレースを行う新たな記録方法を試みたいと考えている。円頭大刀の生産主体については、先行研究でも定説が出されていない。奈良盆地の有力古墳から出土した装飾付大刀を改めて見直す必要を感じている。

本研究では、把頭に獣文をあしらった獅嚙環頭大刀の研究も視野に入れている。これまでに円頭大刀の集成はほぼ完了し、資料調査の段階に入ったので、今年度は獅嚙環頭大刀の集成にも取り組む予定である。先行研究の論文を参照し、発掘調査報告書を通じて実測図と写真の収集に取り組む。



## 古代末期地中海世界の女性と個の発見

研究期間：2019年4月1日～2023年3月31日

文学部 史学科 教授 足立 広 明

専門分野：歴史学、宗教学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

西洋古代末期はそれ以前の多神教が途絶え、一神教が圧倒していく大きな変容の時代であった。儀礼で結ばれたそれまでの社会的紐帯は緩み、個別の都市を越えた普遍的な真理を求める風潮が強まっていた。キリスト教はこのような風潮のなかで台頭し、パウロからアウグスティヌスに至る数百年の間に、共同体を離れた神と向き合う個人という思想を発展させていった。

しかし、パウロにせよアウグスティヌスにせよ、皆男性である。修道士や司教が人々を導く新しい指導者となっていく同時代を、女性たちはどのように過ごしたのであろうか。本研究は、男性の使徒パウロに対応する女性の使徒として古代末期に人気を博したテクラの物語の分析とその受容過程を中心に、女性たちが新しい時代に対応する個の形をいかに形成したかを探ろうとするものである。

### 【研究の成果】

昨年度の成果としては、2019年夏にオックスフォード大学開催の第17回国際教父学会での発表内容がようやく論文活字化されたことが大きい(“I Baptize Myself in the Name of Jesus Christ” Female Apostle Thecla and her Self-Decision in front of Jesus”, *Studia Patristica* Vol. CXXIV)。また、昨年6月には西洋古典学会第71回大会にて元首政期ローマの地方都市における女性の地位について、近年さかんな碑文研究に基づく研究発表を行い、広く問題提起した(「ウンミディア・クァドラティッラの仲間たち—ローマ世界における女性の公的主体(public agency)とその変容」。この成果については『奈良大学大学院研究年報』第27号に同名の論文として活字化して掲載した。

さらに、これらの研究を踏まえ、古代末期にテクラ崇敬を受容した女性の例として5世紀の皇妃エウドキアを取り上げ、2月に開催された国際学会Pacific Partnership in Late Antiquityおよび3月に本学オンライン開催の日本ビザンツ学会において「テクラからエウドキアへ—殉教者キュプリアノス伝と古代末期の女性のエージェンシー」と題する学会発表をそれぞれ行った。エウドキアは残存量で有名な女性詩人サッフォの三倍の量の詩作を残しており、そのうちの一つ『殉教者キュプリアノス伝』を取り上げ、テクラの道を歩む少女ユースタと彼女を誘惑しようとして失敗し、改宗する魔術師キュプリアノスの描写分析から、移行の時代＝古代末期の女性のエージェンシーの変容過程を追った。現在同発表の論文文化を目指している。

### 【今後の計画(または展望)】

これまでのテクラ研究をベースとしながら、テクラを受容した古代末期の女性たちの実像を追う。古代末期には禁欲修道生活において信徒の模範となった女性が数多く輩出した。彼女たちは代表的な教父の尊敬を集め、ヨハネス・クリュソストモスと交友のあったコンスタンティノープルのオリュンピアス、カパドキア教父のニュッサのグレゴリオスの姉マクリナなどがそれで、いずれもテクラの道を歩む人生を送ったとされている。上述の皇后エウドキアもこのような女性の一人で、ギリシアのアテナイの哲学者の娘に生まれ、イエルサレムのキリスト教巡礼・修道者として人生を終えたエウドキアのアイデンティティの変容過程を上述史料の分析から明らかにするのが当面の課題である。



## 戦後日本における戦時上海邦人文芸文化ネットワークの移植と展開

研究期間：2019年4月1日～2023年3月31日

文学部 国文学科 教授 木田 隆 文

専門分野：日本近代文学、外地文学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

本研究は、戦時下の上海および大陸各都市で活動した日本文学者・文化団体の人的ネットワークが、戦後日本の文芸文化の創生と展開に与えた影響を検討するものである。

### 【研究の成果】

研究3年目にあたる本年度は、本来であれば研究最終年度として研究成果の公刊等を実施する予定であった。ただ、コロナ禍の影響が長引き、本研究の中心となる海外図書館および国内所蔵機関の調査が思うように進まず、研究の進捗が当初予定よりも遅延した。そのため研究期間の延長を申請し、最終報告を次年度（2023年）に実施することにした。そこで本年度は次年度の研究成果公開に向けた研究基盤の充足に力点を置き、これまでに収集した資料の整理と精査に力点を置いて作業を進めた。また同時に、国内調査機関の見直しと中国側の研究者との連携を図ることで、国内外の資料の入手方法についても再検討を行った。

その本年度の具体的な調査研究成果としては、まず『上海文学』の全号発見が挙げられる。『上海文学』は日本統治下の戦時上海で結成された邦人文学団体・上海文学研究会の機関誌で、現地の文芸文化の動向を示す一級の資料であるとともに、本研究のキーパーソンである池田克己が実質的な編集主幹を務めた雑誌でもある。ただ同誌は上海図書館徐家匯蔵書楼に2号を除く全冊所蔵があるものの、何らかの事情により近年公開されておらず、閲覧が極めて困難な状態にあった。その状況を受け、稿者は数年にわたり同誌の収集を試みていたが、本年度これまで未発見であった第2号を含む全冊の入手に成功した【図版1】。そのため本年度は同誌の復刻出版も計画し、その細目・解題等の整備に取り組んだ。なお同誌の全号発見については、朝日・読売・毎日および各地方紙の報道に協力し、研究成果を広く一般に公開することにも努めた。

さらに本年度は、前年度からの継続作業として、池田克己の敗戦直後の書簡群の翻刻・調査も実施している。この書簡群は、敗戦後に池田とともに「日本未来派」を結成した古川武雄（筆名・八森虎太郎）に宛てられたもので、日本未来派成立の背景にかかわる具体的な情報をうかがい知ることができる資料である。その翻刻を通じて、敗戦後の池田克己の具体的な創作出版活動と、その周辺にあった日本未来派を軸とする戦後詩壇の動向を確認する準備を行った。さらに本年度はその書簡

に現れた文化的な水脈をたどるために、池田の戦前期の活動にも目を向け、彼が編集に関与した『豚』・『現代詩精神』の収集、分析にも取り組んだ。その結果、戦前奈良―戦時上海―戦後日本へと広がる文芸文化ネットワークの一端を確認することができた。

### 【今後の計画（または展望）】

次年度は状況が許せば海外調査を再開し、資料収集および研究の充実化を図る。

また研究最終年度の成果報告として2022年7月に琥珀書房より『上海文学 復刻版』を上梓する【図版2】。また可能であれば、「池田克己書簡」の翻刻についても出版する予定である。



上海文学研究会『上海文学』第2号 表紙（1943年10月）



木田隆文・趙夢雲共編『上海文学 復刻版』  
（2022年7月、琥珀書房）パンフレット



## 日本中世・近世都市郊外の開発とその歴史的過程に関する基礎的研究

研究期間：2019年4月1日～2023年3月31日

文学部 史学科 教授 河内 将 芳

専門分野：日本史学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

申請者は、日本中世・近世の都市のうち、おもに京都をフィールドとして、その都市社会についての研究をおこなってきた。京都と一口にいっても、歴史的には多様な意味合いをもつが、申請者がおもに対象としてきたのは、中世、京中（洛中）とよばれた都市の中心市街地とその周辺を示す洛外といった、きわめて限定された地域（いわゆる洛中洛外）であった。

これは、中世、とりわけ戦国期の京都の中心市街である京中（洛中、上京と下京）が惣構とよばれる城塞のごとき施設にとり囲まれるという空間的なありかたに起因したもののだが、申請者は、そのかざられた都市空間のなかで展開されたさまざまな社会的・文化的事象などについて検討を加え、研究をすすめてきた。

そうした研究をつづけていくなかでうきほりとなってきたのが、中世から近世にかけて、とりわけ豊臣秀吉の時代以降、洛外やそれより外側である郊外における開発とそこへの都市社会の拡大が顕著にみられるということである。その開発の歴史的過程をあきらかにしたいと考えたことが本研究の背景である。

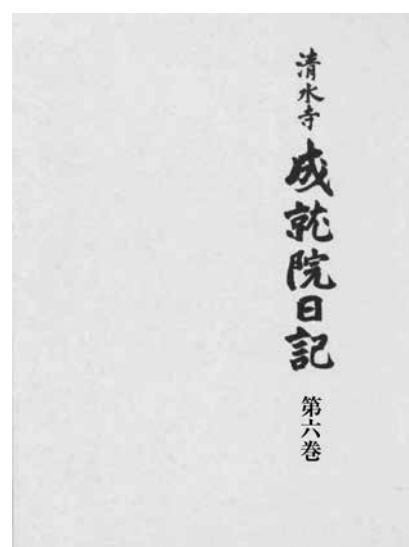
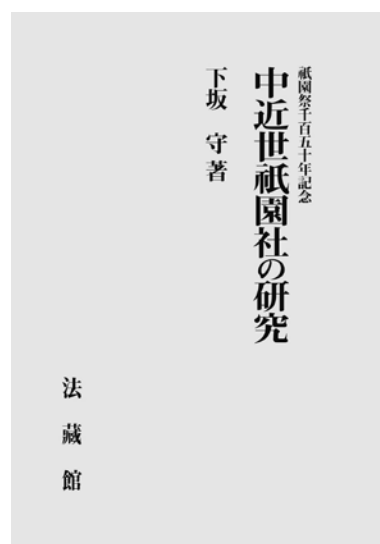
### 【研究の成果】

上記の背景をもとに（１）八坂神社所蔵史料の調査・研究（２）清水寺所蔵史料の調査・研究（３）八坂神社・清水寺以外の寺社所蔵の史料の調査・研究をおこなった。

そして、2021年においては、（１）の成果として河内将芳『改訂祇園祭と戦国京都』（法蔵館文庫、2021年）、下坂守『中近世祇園社の研究』（法蔵館、2021年）（２）の成果として清水寺史編纂委員会編『清水寺成就院日記 第六卷』（法蔵館、2021年）、河内将芳「地主祭の御旅所をめぐる変遷」（『成就院日記』翻刻・刊行にあたって②）（『清水』222号、2021年）、（３）の成果としては、河内将芳「〔中世妙蓮寺の寺地と立地について〕」（『興風』33号、2021年）を刊行した。

### 【今後の計画（または展望）】

2022年度も残された費用によって2021年度と同様の調査・研究をすすめる計画である。





# 帝国日本における戦時輸送の地域間関係に関する研究

研究期間：2019年4月1日～2023年3月31日

文学部 地理学科 教授 三 木 理 史

専門分野：歴史地理学、交通地理学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



## 【研究の背景】

本研究は2013年度から実施してきた「南満洲鉄道の輸送に関する歴史地理学的研究」、「『満洲国』期における満鉄の輸送と地域変容」の研究内容を継承しつつ、1940年代以後の動向を、内地との連携を意識して1940年代の帝国日本の輸送を地域間関係に配意し研究範囲を拡大した。

## 【研究の成果】

本年度の直接的成果は、①三木理史「第二次世界大戦末期の資材転用と鉄軌道休廃止」（奈良大学紀要49、2022年）15-32頁、②同「第二次世界大戦末期の民鉄休廃止と資材転用」（奈良大地理28、2022年）73-90頁である。これらは戦時輸送体制を維持するため内地の閑散線区を選定して資材を調達し、それを占領地や外地はもとより、内地でも特に戦時輸送と密接に関わる路線の強化に転用した過程を追究したものである。それらの事実自体は周知されているが、本格的に追究した成果はほぼ皆無であった。①は鉄道博物館所蔵『長崎惣之助文書』（DVD版）を活用することで体系的に分析したものである。計画的に実施した国鉄に対して、辻褄合わせて実施した民鉄は事実関係の拾遺自体が膨大な紙幅を要したため、「資料」として別に②を補論としてまとめた。

関連論考として、③三木理史「『大手民鉄閑散線区の廃止と沿線地域—名古屋鉄道の岐阜県閑散

4線区廃止を事例に一」（鉄道史学39、2021年）3-20頁、④同「1950年代の地方鉄道休廃止とその要因—高度経済成長期前の仙台鉄道休廃止を事例に一」（奈良大学大学院研究年報27、2022年）1-20頁をまとめた。これらは直接戦時輸送を扱っていないが、大きな影響を受けた事例といえる。

## 【今後の計画（または展望）】

本年度は、本研究の「課題A」である大陸における戦時輸送を含む『満鉄輸送史の研究』（塙書房）の刊行を最優先に、さらに③論文の後編と道東での地方交通線の論文執筆を予定している。





## 筋強直性ジストロフィーにおける疲労感の解明とヘルスケア行動改善プログラムの開発

研究期間：2019年4月1日～2023年3月31日

社会学部 心理学科 教授 井村 修

専門分野：臨床心理学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

筋強直性ジストロフィータイプ1（以下DM1と略）は、第19番染色体のDMPK遺伝子の配列異常で生起し、筋強直を主症状としながらも、心伝導障害、白内障、認知機能の低下、抑うつ感や疲労感など様々な合併症状を呈する難治性疾患である。本研究では、DM1患者のQOLを改善させるため、過度な疲労感の解明と支援プログラムを開発することを目的とする。研究Ⅰでは生体情報端末を利用し、DM1患者の行動特性（運動量や睡眠パターン）を測定し、過度な疲労感を生じさせる要因を明らかにする。研究Ⅱでは、疲労感を軽減させると想定される睡眠、軽度の運動、ヘルスケア行動のプログラムを作成し、DM1患者のQOLの改善をはかる。

そこでDM1患者の疲労感の解明を、生体情報端末や心理的評価尺度を使用して行うことを目的として10名の研究参加者を得て、活動量や睡眠時間、体重をセルフモニタリングしながら、研究者の動機づけのもとに健康の増進を試みる。

### 【研究の成果】

HbA1c（血糖値）、疲労感（MFI-20）、昼間の眠気（JESS）、抑うつ傾向（PHQ-9）が測定された。介入前（T1）とフォローアップ時（T4）を比較した。体重の平均値はT1で75.1kg、T4で71.4kgであった。HbA1cの平均はT1とT4いずれも5.2であり変化は認められなかった。疲労感の平均値は、T1の70.6からT4で63.9に減少していたが、疲労感の依然高い水準となっていた。JESSの平均値は、T1では10.7で、T4で9.9であり変化がわずかであったがこれも高い水準であった。PHQ-9は、T1で9.3がT4で6.4と減少した。疲労感と抑うつ傾向で低下が認められた。生体情報端末を利用した健康増進プログラムは、体重やHbA1cのような生理的指標の変化については、十分な成果を得るには課題が残った。しかし、本プログラムにより、健康に関心を向けDM1患者の主体性・能動性を高める効果があるものと考えられた。

新型コロナウイルスのため、当初の研究計画の

推進が困難になった。そこで一般の健常者を対象に疲労感のWEB調査を行った。測定尺度はMFI-20、FSS（Fatigue Severity Scale）、PHQ-9を実施した。692名のデータをIRT（段階反応モデル）により分析したところ、FSSの方がMFI-20より信頼性が高いことが示唆された。また疲労感と抑うつには有意な相関が見られた。疲労感の評価尺度としてはFSSの方が望ましいことが示唆されて。DM1患者の海外での疲労感調査でもFSSの使用が多い。

### 【今後の計画（または展望）】

厚生労働省によると、2020年の日本人の平均寿命は男性81.6歳、女性87.7歳となり、人生100年時代も現実のものとなりつつある。また障害を持つ人々の寿命も延びる傾向にある。しかし、DM1患者の平均寿命は55歳程度とここ20年間改善がみられていない。彼らの健康状態をさらに向上させるためには、本研究のようなセルフコントロール力を高める、健康管理プログラムの開発が必要だと思われる。なお、新型コロナウイルスの感染拡大のため、研究者の医療機関への立ち入りが制限されている。研究期間を1年間延長したが、初年度のように研究協力者を得られるか不明である。したがって今後、研究計画の修正も求められる可能性がある。

表1 体重とHbA1cの推移

	T1	T2	T3	T4
体重 (kg)	75.1	73.3	71.1	71.4
HbA1c (%)	5.2	5.4	5.4	5.2

表2 MFI-20, JESS, PHQ-9の得点の推移

	T1	T2	T3	T4
MFI-20	70.6	70.1	68.2	63.9
JESS	10.7	12.6	12.0	9.9
PHQ-9	9.3	9.6	7.8	6.4



## 記述的規範の認知的過程に関する検討

研究期間：2016年4月1日～2024年3月31日

社会学部 心理学科 教授 村上 史朗

専門分野：社会心理学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

私たちが普段従っている規範は、法律をはじめとした明示的な規範だけでなく、周囲の他者の行動から暗黙裡に読み取ったパターンも含まれており、後者を記述的規範と呼ぶ。例えば、自動車運転時の速度については、「制限速度以下で走行する」という明示的な規範がある一方で、「車の流れに従って走行する」という記述的規範も存在する。車の流れが場合によっては制限速度を多少オーバーすることもあるように、記述的規範は明示的な規範と異なることがあり、規範逸脱行為の一因となっている。車の流れであれば周囲の車の動きを観察すれば良いのである程度正確に捉えることができるが、周囲の他者の行為は観察できない場面も多いため、その場合は記述的規範の認知は推測によることになる。例えば、自動車の後部座席シートベルト義務化については、他の車がどの程度遵守しているのか観察することは困難なので、「周囲の他者がどの程度守っているか」については推測するしかない。その推測の材料となるのは、それまで一般にどの程度の人が規範を守っていたかについての知識であると考えられる。そしてこの推測は、特にこれまでになかった新しい規範については、必ずしも正確ではなく、バイアスが見られると考えられる。本研究では、このような記述的規範認知のバイアスと関連する認知的要因を検討することを目的としている。

### 【研究の成果】

前年度までは、特に行為の観察可能性に注目して検討を行った。基本的には、周囲から観察しやすい行為よりも、観察しづらい行為において記述的規範認知の正確さが低下する傾向が見られた。また、その際のバイアスは、回答者本人よりも周囲の他者の方が規範から逸脱した行為の頻度が高いと推測する方向で見られた。つまり、「自分は規範を遵守しているが他者は自分ほどには遵守していない」と考える傾向が高かったのである。

今年度は、特定の感染予防行動があまり実質的な意味を持たない状況における、価値観に関する記述的規範（共有信念）と、新型コロナウイルス感染予防行動意図の関連を検討した。例えば、アルコール消毒をした直後に別の場所でアルコール消毒をすることには感染予防効果を高める意味はほとんどないだろう。このような場合に感染予防行動をとる場合には効果を期待しているわけではないため、価値観が関連していると考えられる。個人の価値観も効果を持つだろうが、それよりも大きな効果を持つと考えられるのは、周囲の他者がどのような価値観を持っているかに関する信念（共有信念）である。本研究では、文化的自己観を用いて、

感染予防行動意図との関連を検討した。周囲の他者が相互協調的自己観を持っていると捉えていれば、相互協調的な行為への誘因が生じると期待される。感染予防行動に効果が期待できない状況でも、周囲の他者を安心させるために感染予防行動をとろうとすると考えられる。本研究では、シナリオによる場面想定法を用いて、この予測を検証した。併せて、シナリオ中の刺激人物への印象を探索的に検討した。実質的に感染予防行動の意味がない状況であっても、感染予防行動をとることが規範的な行為であると認知されていれば、その行動をとる人物への印象が良くなると考えられるが、そのような傾向が見られるかを検討した。

本研究で用いたシナリオは、いずれも感染予防行動の効果が期待できない状況を設定していたが、感染予防行動をとる人への印象は、感染予防行動をとらない人への印象よりも明確に良くなっていた。このことは、効果にかかわらず感染予防行動をとること自体が規範化していることを示唆している。また、予測とは異なり、相互協調的自己観の共有信念と感染予防行動意図の間に関連は見られなかった。このことは、感染予防行動の規範化が関連している可能性がある。全体的に感染予防行動をとると回答した割合が高く、デフォルトの行動選択になっていたと考えられる。

これらの結果をまとめると、以下ようになる。まず、感染予防行動意図は十分に「当然の選択」となっているため、価値観の共有信念の効果は見られなかった。そして、予防行動の効果が無いと思われる状況でも、感染予防行動をしている人物への印象が良くなっていた。このことから、効果の有無にかかわらず、感染予防行動をとることは礼儀などのように規範化していると考えられる。

### 【今後の計画（または展望）】

「冷房を28度に設定する」という規範は、環境保護というフレームでも、節約というフレームでも解釈可能である。このような、複数フレームで解釈可能な規範について、記述的規範の効果を検討する調査を行う。具体的には、(1) 複数フレームで解釈可能な規範の行為について、それぞれのフレームをプライミングする先行課題を条件ごとに設定し、その後にターゲットとなる規範的行為について質問を行う構成、(2) 複数フレームに関するシナリオを提示した場面想定法による調査研究、のいずれかを行う。前年度の予備研究結果を再検討し、いずれの調査を行うかを決定、実施する。

また、記述的規範認知の自動性を検証する実験的研究も行う。記述的規範認知が行動選択に及ぼす影響はヒューリスティック的であると仮定し、高認知負荷時にその影響がより大きくなるとの予測を検証する。



## 高次表意と証拠性／意外性をめぐって

研究期間：2018年4月1日～2023年3月31日

特別研究員・特命教授 内 田 聖 二

専門分野：言語学、英語学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

本研究は言語類型論という証拠性 (evidentiality) と意外性 (mirativity) という文法的カテゴリーを関連性理論における高次表意 (higher-level explication) という考え方をういて再検討するものである。証拠性は新情報の情報源を明示することと、意外性は新情報と既知情報の差が予想外のものであることと、密接な関係があり、その言語上の具現化は言語によって異なる。その基本線を踏まえながら、日本語と英語との違いへ言及することも本研究の重要なテーマの一つとなる。

### 【研究の成果】

新型コロナウイルス感染症の影響で研究延長が許可された今年度は、(1) これも昨年度からの課題である、日本英文学会のシンポジウムで講師を務めることと、(2) 2020年度にオンライン形式で行われた国際大会の原稿を文字化すること、の2つの目標があった。前者の件では第93回日本英文学会（オンライン開催）において、シンポジウム「認知語用論からみた言語の諸相」の講師として「高次表意からみた証拠性 (evidentiality)」のタイトルで口

頭発表を行った。また、その原稿を加筆修正した「メタ表象からみた証拠性 (evidentiality)」を『奈良大学紀要』（第50号、pp. 129-145）で公刊した。中心トピックは本研究の核となる証拠性と高次表意あるいはメタ表象との関係で、とりわけ日本語の感覚・感情表現や願望表現には情報源と当該人物の関係が証拠性と密接にかかわることを論じた。後者の件では、高次表意が必ずしも具現されない英語と高次表意が具現される傾向のある日本語との差について、国際学会EPICS IXでの口頭発表を文字化する過程で、文副詞、because節、文末小辞、伝達節、private predicatesなどの分析をさらに発展させ、比較言語学への応用可能性を示唆したものを国際雑誌に応募し、現在審査中である。

### 【今後の計画（または展望）】

上記の国際雑誌に応募した論文を精査し加筆修正する作業が残されている。また、本研究のキーワードのひとつ、意外性 (mirativity) の分析に関してやり残したところがあるので、今後そこを補いたい。



# 土木技術からみた古代日韓溜池の歴史的関係性

研究期間：2018年4月1日～2023年3月31日

特別研究員 小山田 宏 一

専門分野：古代東アジアの治水灌漑とその土木技術、考古学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



## 【研究の背景】

古代日韓の溜池は、築造年代、池の構造、築堤工法などの基礎資料が蓄積されてきた。とくに、粗朶・草本などの天然材料を敷設して地盤や盛土を補強する補強土工法は、古代日韓溜池に共通する土木技術であり、彼我の技術系譜とその技術移転のプロセスを具体的に解明する手がかりになる。

このような調査研究の進展をふまえ、本研究では、土木技術からみた古代日韓溜池の歴史的関係性を解明するとともに、アジアモンスーン地帯における溜池灌漑システムの発展と、その歴史的意義を解明するための基盤を構築することが目的である。

## 【研究の成果】

2021年度の核心的テーマは、日本・韓国・中国の古代溜池をつなぐ土木技術系譜の解明である。日本最古のダム式溜池である狭山池にみられる築堤技術の特徴は、表土ブロックと粗朶の敷設を併用する補強土工法であり、その系譜は忠清北道堤川市義林池に求められる。義林池は、粗朶のAMS分析からA.D180年～410年の年代が得られているが、本研究では、百済が4・5世紀頃に南漢江流域の地域経営の中で建設した水利施設であると理解する。

このことから、狭山池に代表される古代日本のダム式溜池の土木技術系譜が半島三国時代の百済に求められるという結論に達した。つまり、社会基盤備事業を進めることが課題であった7世紀倭国の王権が、友好関係にあった百済に要請し、ダム式溜池の設計思想・土木技術・運用方式の提供を受けたものとなろう。

義林池は三国時代の朝鮮半島に突如として出現した完成度の高いダム式溜池である。しかし半島の中で、その技術系譜はたどれない。そこで古代中国とのかかわりが問題となる。古代中国の溜池は、自然の沼沢地などを改造したタイプから始まる。北魏『水経注』によると、淮河と長江（揚子江）の流域に溜池が多いが、地理的環境からタイプが異なる。

低平地がひろがる河南省から安徽省北部にかけての淮河流域はダム式が少なく、河道跡の窪地に堤を築く低地型ため池が優勢である。写真1は河南省信陽市固始県の事例である。水田は水面より高く、高低差を利用した重力灌漑を実施することは不可能で、龍骨車と呼ばれる揚水機を使って水を揚げている。一方、江蘇省南部から浙江省北部

にかけては谷の出口をふさぐ河谷型のダム式溜池が多い。

このことから、義林池のルーツは、溜池灌漑が発達していた中国の中でも、ダム式溜池が優勢である江南に求められる。写真2は、浙江省余姚市の穴湖である。典型的なダム式溜池で、三国時代頃に成立したと推定される。江蘇省南部から浙江省北部にかけては、紹興市の鑑湖のように後漢時代にさかのぼる池は少数であり、その多くは江南の人口が増加して農業生産力が飛躍的に増大した三国時代以降になる。

古代王権が掌握する土木技術は、日常的な交流で伝わったものでない。百済は江南の六朝と、古代日本の王権は百済と友好関係を築いていた。高度な土木技術は、こうした外交関係を通じてもたらされたのである。狭山池は、中国江南にはじまる古代東アジア溜池ロードの終着点である。

## 【今後の計画】

本年度は補助事業期間の最終年度であり、調査報告書を作成する。コロナ禍で韓国の研究者と対面して議論を重ねることは実現できなかったが、編集段階でできる限り成果・問題点・課題を共有し、今後の研究を進める上での基盤を構築する。



写真1 河南省信陽市固始県の溜池



写真2 浙江省余姚市の穴湖



## 北東アジア認識から見た19世紀末英米露政治思想の比較可能性に関する複合的研究

研究期間：2018年4月1日～2023年3月31日

社会学部 総合社会学科 教授 竹 中 浩

専門分野：西洋政治思想史学、比較政治学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

19世紀末、シベリア鉄道の建設と日本の大陸進出は、以前にもまして欧米世界の関心を北東アジアに向けさせることになった。以来、今日にいたるまで、北東アジアを自らの世界と関係づけるために、欧米世界はさまざまな知的・政治的営為を積み重ねてきている。これについて比較史の立場から解明することは、すぐれて現代的な意義を有する課題である。その一環として、本研究では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、欧米諸国の中でも北東アジアと特に深い関わりをもつロシア及び英米の知的世界が、この地域のマイノリティをめぐる状況をどう捉えたかについて明らかにする。

### 【研究の成果】

2021年度はロシア帝国内に住むモンゴル系の民族ブリヤートの同化政策についての研究に集中し、ブリヤートの同化と正教宣教団の活動に関する研究を論文としてまとめた。東シベリアの「ロシア化」とその基礎にある思想の解明は、本研究においてとりわけ重要な位置を占める部分である。同化政策全体の基本的な構図を明らかにするために、そこで文明、人種、言語、宗教といったさまざまな要素がどのように関係しているかについて分析し、ロシア正教の宣教活動においてチベット仏教に対する強い関心があること、またこの時代のロシア政治思想において、シベリアとアメリカの類比や、連邦制という新しい国家像への注目が見られることを明らかにした。

### 【今後の計画（または展望）】

2022年度は本課題についての研究の最終年度になるので、これまで行ってきた個別の分析をより大きな研究の枠組みに、特に帝国統治における文化と政治の関係というテーマにつないでいく。そのために、ロシア帝国の東部辺境である北東アジア地域と、最近とみに関心が高まっている西部辺境及び中東欧地域を結びつける視座を確立する。今年度は、本研究において北東アジア研究に採用した視点をういつつ、中東欧地域及びバルカンの諸民族をめぐるロシア知識人の思想的な立ち位置を、ヨーロッパの国際情勢との関連に焦点を合わせて検討する。

これら諸民族との関係をめぐって19世紀末のロシア帝国が直接対峙していたのはオーストリア＝ハンガリー帝国やオスマン帝国であったが、オーストリア＝ハンガリーの背後にあってこれを支援していたドイツや、オスマン帝国が海峡問題をめぐってロシアに譲歩しないよう警戒していたイギ

リスとの関係も潜在的な緊張を孕んでいた。英独関係が比較的良好であったこの時期、ロシアは、同盟相手を求め、政治理念において大きく異なると考えられたフランスに接近することになる。このように複雑な国際関係をめぐって保守的メディアの間に生じた立場の分岐を、バルカン問題と反ユダヤ主義を素材として明らかにするのが今年度の一次的な課題である。

この作業を通じて、帝国が抱える民族問題一般へと、可能な限り視野を広げていく。広大な版図を持つロシア帝国は、著しく性格の異なった民族を内に抱え込んでいた。例えばブリヤートは、帝国の支配層から見て、文化的には明らかに異質でありながら、政治的には概して無害な人々であった。これに対して南西部辺境に住む「ウクライナ人」は、文化的には支配層と近似していながら、政治的には緊張を生じさせる可能性を持っていた。文化的な異質性は必ずしも民族間の政治的敵対をもたらさず、今回われわれが思い知らされているように、文化的な近さは政治的な親和性を保証しない。このことは、ロシアと同様、領域内に異なった文化的特徴を有する民族を含む中国について考える際にも留意すべき点である。特にモンゴル人やチベット人と漢族の関係は、ロシア帝国の民族間関係と比較可能な側面を持っている。文化と政治の複雑な関係が帝国統合と帝国解体後の歩みに及ぼす影響についての比較史的検討は、本研究から派生するきわめて重要な研究課題である。



露仏接近を推進したミハイル・カトコフ



## 泳いで周辺の島々に分布拡大するイノシシの実態解明と対応策

研究期間：2018年4月1日～2023年3月31日

名誉教授 高橋 春成

専門分野：生物地理学

活用した研究費：科学研究費 基盤研究(C)



### 【研究の背景】

近年、海や湖を泳いで島に分布拡大するイノシシがみられるようになり、島でのイノシシ被害が深刻となっている。そのため、泳ぐイノシシの実態解明と被害対応が必要である。

### 【研究の成果】

2021年12月に新たな調査対象とした岡村島に設置した2台の調査用カメラに、海を泳ぐイノシシが複数映った。カメラは岡村島の東側の海岸に設置したもので、ここには狭い瀬戸を挟んで対岸に小大下島がある。両島間の直線距離は、200～400mほどである。2台のカメラの作動期間は、2021年12月～2022年3月であり、この期間中に、岡村島から小大下島方面に泳ぐイノシシや岡村島に上陸するイノシシが複数映った。映ったイノシシは、親子と思われる群れ、単独の成獣、単独の亜成獣などであり、多様なイノシシが海を泳いでいるようす、島と島の間を往来している可能性などがうかがえた。さらに、夜間にも海岸に降りて

いくイノシシが複数映り、夜間にイノシシが海を泳ぐ可能性を検討する必要が出てきた。

写真1～4は、これらのイノシシの動画の事例で、それぞれの動画の一部を切り取ったものである。これまでに海や湖を泳ぐイノシシが偶然発見され写真に撮られたことはあるが、このような陸からの泳ぎ出しや上陸のようすをとらえた動画や写真は世界的にみてもほぼ前例がないと思われ、極めて貴重なデータだと考える。合わせて、夜間にも泳ぐ実態が解明されれば、イノシシの生態や適応力（人間との関係を含めた）に関する極めて大きな成果となる。

### 【今後の計画（または展望）】

今回のデータが猟期にあたる時期のもので、狩猟などの人為的な影響を検討する。さらに、年間を通したデータを収集し、イノシシの行動圏や分散などと泳力の関係について分析を行う。これらをふまえ、海域の島々におけるイノシシへの対応策について提言を行う。



写真1-① 岡村島の海岸に降りていく親子と思われる3頭（内2頭が写っている。2022年1月29日午前7時27分5秒）



写真1-② 岡村島の海岸から小大下島方面に泳いでいく親子と思われる3頭（2022年1月29日午前7時27分16秒）



写真2-① 岡村島の海岸に降りていく1頭の成獣（2022年2月23日午前6時48分24秒）



写真2-② 岡村島の海岸から小大下島方面に泳いでいく1頭の成獣（2022年2月23日午前6時48分42秒）



写真3 夜間に海岸に降りていく4頭の群れ（2022年2月26日午後10時46分11秒）



写真4 泳いできた1頭の成獣が岡村島に上陸するところ（全身が濡れている。2022年1月6日午後2時47分47秒）



# 日本の森林政策に資する地籍問題の探索的研究

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

文学部 地理学科 教授 岡 橋 秀 典

専門分野：人文地理学、農村地理学

活用した研究費：科学研究費 挑戦的研究(萌芽)



## 【研究の背景】

日本の森林政策は大変革期を迎えている。林業の成長産業化と森林資源の適切な管理の両立を図るため、新たな森林経営管理制度の下、森林環境税を投入して「新たな森林管理システム」を構築しようとするものである。しかし、この政策には対象となる山林の地籍が未整備という大きな陥穽が存在するので、この問題の克服がこの政策の成否を大きく左右することになる。地籍については国土交通省や地方行政の実務サイドで一定のデータ提示がなされているが、森林政策と関連づけた地籍の研究は皆無に等しい。それゆえ、本研究はこの山林の地籍問題に学術的な立場から挑戦することとし、①地籍調査の進捗プロセスと要因、②地籍調査の進捗率と他の地域要素との関連を中心に、その実情について探索的な研究を行う。その成果に立って、③地籍調査状況を踏まえた森林管理モデルの構築に進む。以上をもって、日本の森林政策へ貢献することを目的とする。

## 【研究の成果】

本研究では、次の3つの課題（下位目的）について分析を行い、それに基づく探索的な研究を行う予定である。第一課題は「地籍調査の進捗プロセスと要因の分析」、第二課題は「地籍調査の進捗率と他の地域要素との関連の分析」、第三課題は「地籍調査状況を踏まえた森林管理モデルの構築」である。

2021年度は、第一課題についてまず地籍調査の進捗率の正確な把握を行った。これについては、国土交通省から都道府県単位および市町村単位での地籍調査進捗率のデータを入手し、GISを用いた地図化により地域的差異について詳細な分析を行った。第二課題については、林野率、人工林率などの土地および森林の特性に関わる統計データの収集を行い、数値を入力してデータベースを作成した。第二課題については、地籍調査を進捗させている要因の分析も重要である。そのため、地籍調査の実績のある企業に対して聞き取り調査を行い、都道府県による地域差の要因について貴重な情報を得た。この結果を踏まえ、地籍調査の進捗率は、都道府県および市町村といった行政側の姿勢、地籍調査を実施する業界の取り組みが大きな意味を持つことが明らかとなった。今後、研究の枠組みをより精緻化して、探索的研究を進める予定である。

## 【今後の計画（または展望）】

2022年度は、2021年度に作成したデータをもと

に、全国レベルでの定量的な分析を行い市町村の分類や空間的パターンの検出を行うとともに、地域差の要因も分析する。さらに、地籍調査の進捗率と森林・林業特性との関係についても定量的に関係を分析する。第二課題については、前年度とは逆に進捗率の低い県を取り上げて検討する。奈良県をはじめ近畿地方の諸府県が対象となる。また、これらの府県の中にありながら、例外的に高い進捗率を示す市町村を選んで、それらの促進要因も明らかにし、これを踏まえて他の市町村の進捗を妨げている要因についても検討する。

2023年度は、「地籍調査状況を踏まえた森林管理モデルの構築」を行う。地籍調査の遅れは、森林管理や林業の利用に障壁となる。そこで、地籍調査が遅れている状況下で、森林管理を進めるための方策を検討する。これについては既に愛知県豊田市の事例を調査しているが、それ以外の事例も検討する。他方、地籍調査が進捗した事例については、地籍が明確になることによって可能となる新たなモデルの模索が重要である。銀行の森林信託事業はその代表的モデルであり、既に着手している岡山県西粟倉村の先駆事例を中心に調査し、このモデルの展開の可能性について明らかにしたい。

表1 地籍調査の実施状況（全国）

	対象面積 (k㎡)	2020年度末までの 実績面積 (k㎡)	2020年度末時点の 進捗率 (%)
DID（人口集中地区）地域	12,673	3,316	26.2
宅 地	19,453	9,942	51.1
農用地	77,690	54,696	70.4
DID以外の地域	178,150	81,367	45.7
小 計	275,293	146,005	53.0
合計	287,966	149,321	51.9

「国土交通省地籍調査 Web サイト」を一部変更して作成。  
<http://www.chuseki.go.jp/situation/status/index.html>（2021年10月27日閲覧）

出典：岡橋秀典（2022）

「日本の地籍問題と森林・林業政策一序説として」  
奈良大地理28巻、p.36.

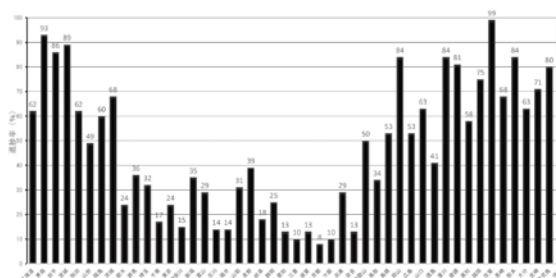


図1 都道府県別にみた地籍調査進捗率（2020年度末、面積ベース）

国土交通省資料より作成

出典：岡橋秀典（2022）

「日本の地籍問題と森林・林業政策一序説として」  
奈良大地理28巻、p.40.



# インドネシアにおける森林・原野火災危険度予報システムの構築

研究期間：2020年4月1日～2023年3月31日

文学部 地理学科 教授 木村圭司

専門分野：気候学、地理学

活用した研究費：科学研究費 挑戦的研究(萌芽)



## 【研究の背景】

熱帯林および広大な熱帯泥炭地における火災は、大量の二酸化炭素排出をもたらす、地球温暖化に大きな影響を与える。インドネシアには広大な熱帯泥炭地が広がっており、人口の増加に伴ってこうした熱帯泥炭地も畑地とされることが多くなっている。熱帯泥炭地を畑地化する際には、高かった地下水位を下げるために、泥炭は乾燥して燃えやすくなる。乾燥した泥炭に焼畑や雷の火が付くと、大量の二酸化炭素が放出される。泥炭火災の発生は、地下水位と良い相関があることが知られているので、本研究では、過去の気象解析結果とインドネシアで観測している地下水位との相関を取り、関係式を構築した。その関係式を用いて、気象シミュレーション予測から地下水位の予測を行い、泥炭火災の予測・予防の一助とすることを目的とする。

## 【研究の成果】

本研究では、これまでインドネシア全土を対象として、熱帯泥炭地における森林・原野火災を、以下の手順で予測するシステムを構築しつつある。①気象シミュレーションによる降水量・気温・風速・土壌水分量の予測、②現地の研究者が観測している地下水位データの利用と検証、③気象シ

ミュレーションを使用した地下水位の予測と検証、である。

計算領域は図1の通りである。計算領域は、インドネシア全域を入るように27kmメッシュ領域をとり (domain01)、主要域を9kmメッシュ (domain02)、3kmメッシュ (domain03～05)、1kmメッシュ (domain06～10) ととった。土壌水分量は4層 (地表から0～10cm, 10～40cm, 40～100cm, 100～200cm) で計算した。地下水位の観測データは、インドネシア国立研究革新庁 (BRIN) の共同研究者から提供を受けた。

WRF結果の土壌水分量をもとに、各観測地点について、重回帰分析により地下水位の算出式を求めた。その結果、最適な窓領域かつ最適な計算日数を取った場合には、決定係数が0.6を超える地点が81%を占める (32点中26地点) という結果となった (図2)。

## 【今後の計画 (または展望)】

地下水位の観測地点について高精度の地下水位予測が可能となったが、これを他地点に拡張しようとしたとき、まだ精度が十分ではない。この点を、今後改善する必要がある。また至急、本研究の成果を論文化したいと考えている。次のステップとしては、相関を予測につなげていきたい。

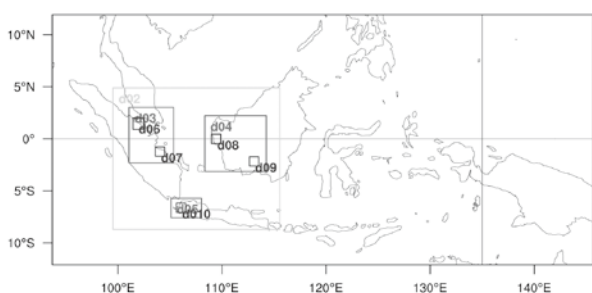


図1 気象シミュレーションWRFの計算エリア

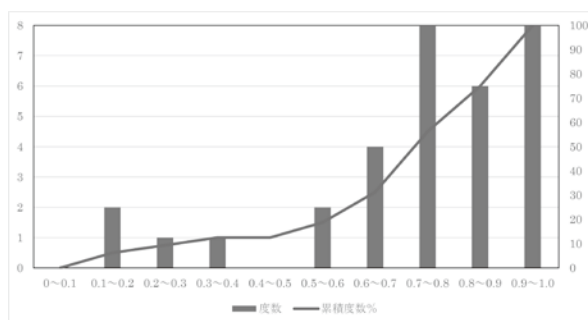


図2 WRFを用いた土壌水分量の計算値と、地下水位の相関をとった際の絶対係数と度数



## 中世後期・近世前期日本語の清濁に対する共時的研究

研究期間：2021年4月1日～2026年3月31日

文学部 国文学科 山 田 昇 平

専門分野：国語学

活用した研究費：科学研究費 若手研究



### 【研究の背景】

本研究は、日本語の清濁に対する歴史的研究である。清濁については、現代語において様々な研究がなされてきた。また、歴史的研究においても、かつての清濁がアクセントのようなプロソディーとしての性格を有していた可能性や、鼻音性の有無を弁別の特徴とした時代があった可能性など、現代語との大きな性質の違いが指摘されてきた。しかし、従来の歴史的研究の指摘は、資料の乏しい時代を対象とした、理論的推定が主であった。本研究は、これに対して、清濁に関する資料が得やすい、中世後期・近世前期を対象とすることで、実証的な共時的アプローチを行うものである。これにより、特定時代の清濁の様相を記述し、時代ごとの清濁を相対化することを目的とする。

### 【研究の成果】

現段階の成果として、次の2点をあげる。

①中世期に用いられた言い習わしである「うむの下濁る」の歴史を明らかにした。この言い習わしは、鼻音要素に続く清音が濁音化する現象（連声濁）を指して用いられたことが知られる。しかし、従来の研究では、その使用場面や使用意識、及びその変遷が十分に議論されてこなかった。本研究では、この言い習わしは、中世前期に天台宗内で、読経の読みを意識して使用され、その後他宗派に伝わり、その後一般にも知られるところとなったという点を明らかにした。このような用語に対する検討を通して、中世期における連声濁の現象に対する意識の一端を明らかにし、本研究全体の基礎とした。この成果は、第124回国語学・国語学研究会「「うむの下濁る」という言い習わしの歴史」（2021年12月4日）で発表し、現在論文を編集集中である。

②キリシタン版『日葡辞書』の清濁の相対化を

図るための情報を整理した。『日葡辞書』は全編がローマ字表記を取る為、中世日本語の清濁に関する重要な情報源として扱われてきた。しかし、その清濁がどのような素性のものかは明らかにされていない。ここでは、清濁が流派特有の読み癖として社会的差異を担う、歌語に注目し、『日葡辞書』で詩歌語注記(*poesia*)を持つ語を抽出した。そして、それを『古今和歌集』の声点諸本にみられる清濁と対照し、特に『日葡辞書』の語形が問題となるものを抽出、整理した。今年度は、この作業によるデータ整理を完了した段階である。この成果を用いることによって、次年度以降は具体的な検証を行うことが可能である。

### 【今後の計画（または展望）】

まず、研究の基礎の充実に努めることを優先し、引き続き術語や主要資料における清濁の情報の検証を行う。特にキリシタン文献は、本研究全体にとっても中心資料となるもので、同時代における清濁の情報源としての位置づけを明確にすることは急務である。具体的には、『日葡辞書』について、上記②の整理した情報をもとに考察・検証を行い、『日葡辞書』の清濁の素性を明らかにする。また、キリシタン文献であるロドリゲス『日本大文典』とコリヤードの「三部作」には当時の濁音が鼻音性を有していたという情報を示す部分がある。これらの情報は概ね共通するが、細部で微妙に内容が異なる。そのため、両者の内容を整理し、その整合性を確認する必要がある。

この他、謡曲資料や歌学の読み癖資料といった資料に対して文献調査を行い、清濁に関する情報の収集・整理に努める。その後、これらの資料に基づきつつ、当該時期特有の濁音の音価や濁音化現象に対する検討を進めていく。



## 現在バイアス選好が公的年金政策に与える影響：経済成長・経済厚生観点から

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

社会学部 総合社会学科 中 坊 勇 太

専門分野：マクロ経済学、行動経済学

活用した研究費：科学研究費 若手研究



### 【研究の背景】

賦課方式（年金給付を同時期に生きる現役世代の年金保険料で賄う方式）の公的年金が経済成長と経済厚生（人々の満足度）にどのような影響を与えるのかについて、これまで数多くの研究蓄積があるが、その多くは時間割引率が一定な設定で行われている。その場合、以下の2つの結果が知られている。①賦課方式年金は個人の貯蓄を減らして物的資本蓄積を阻害することで経済成長率を低下させる。②賦課方式年金が経済厚生を高めるのは、人口成長率が利率よりも高い、いわゆる「動学的に非効率」な状態の場合である。

これらの結果には「時間割引率が一定」という設定が大きく効いている。時間割引率が一定の場合は、個人はいつでも自分の好みに合わせて将来に備えて適切に貯蓄できることになる。そのため公的年金があるとその分自分で独自に行う貯蓄を減らして調整することにより経済成長率が低下してしまう。動学的に非効率な状態では社会的に最適な状態と比べて貯蓄や物的資本が過剰に蓄積されている。よって賦課方式の公的年金があると貯蓄が過剰な状態が解消されるため、人々の満足度が向上するのである。

しかしながら、多くの経済実験から、個人の時間割引率は一定ではなく目先の利益にとらわれて現在に近いほど多く割引く、現在バイアス選好を持つことが明らかとなっている。このことを踏まえ、従来の研究とは異なり、時間割引率が一定ではない現在バイアス選好をもつ個人を仮定し、賦課方式の公的年金が経済成長と経済厚生にどのような影響を与えるのかを分析するのが本研究の目的である。

個人が現在バイアス選好をもつ場合、一度立てた消費貯蓄計画をそのまま実行することができず、現在の消費を計画よりも過剰にしてしまい、その分貯蓄ができない事態に陥ることになる。そのため、政府が年金制度を運営して、いわば強制的に貯蓄させた方が経済成長や個人の満足度が向上することがありうる。つまり、必ずしも貯蓄・物的資本が過剰な状態でなくても公的年金の存在が経済厚生を向上させるケースが出てくる可能性がある。現在バイアスがどの程度強い場合に以上のような状態が発生するのかを明らかにする。

### 【研究の成果】

本年度は現在バイアスと年金制度を同時に扱える基本モデルの構築を行った。個人（家計）は若年期と中年期と老年期の3期間を生き、若年期と中年期に

労働して年金保険料を納め、老年期に年金給付を受けるとする。同時期に若年期と中年期（若年期の個人から見て1世代前）、老年期（若年期の個人から見て2世代前）が共存する、3期間世代重複モデルである。個人は現在バイアス選好をもち、時間割引率について、現在と1期先の間の時間割引率が他の期間（例えば1期先と2期先の間）とは異なる値に設定している。生産については物的資本と労働を投入物とした新古典派コブダグラス型生産関数（マクロ経済モデルでは標準的な設定）である。

以上のような設定のモデルを構築した。個人は自身の現在バイアス選好の存在に気付いている「賢明（ソフィスティケート）」な個人であるとみなしてモデルを解き、各期の消費と貯蓄、資本のダイナミクスを導出した。

### 【今後の計画（または展望）】

今後は以下の3つの観点から研究を進めていく計画である。

(1)基本モデルにおける均衡状態の性質と公的年金が経済成長や経済厚生に与える影響の分析

今年度導出した各期の消費と貯蓄、資本のダイナミクスをもとに、公的年金が均衡の経済成長率と各期の経済厚生に与える影響について分析する。現在バイアスがない場合と比べてどのように影響が異なるのかということに焦点を当てる。

(2)年金制度の違いが基本モデルに与える影響に関する分析

(1)の基本モデルの分析で得られた結果が、年金制度の運営の違い（賦課方式年金か積立方式年金か）や、年金制度の保険料徴収制度の違い（所得税方式か一括税方式か消費税方式か）の影響を受けるか否か、またその影響が現在バイアスの強さとどのように関係するのかを明らかにする。

(3)年金改革を考慮した応用モデルの構築と経済成長・経済厚生に関する分析

現実の政策として先進諸国では確定給付型から確定拠出型への移行という年金改革が実施されている。確定拠出型とは、老年世代への年金給付が、若年世代の年金保険料収入の多寡により決まる方式のことであり、確定給付型とは、確定拠出型とは逆に、老年世代への年金給付が先に決まっており、その給付額に応じて若年世代から保険料を集める方式である。これらの制度を同時にモデルに組み込み、このような年金改革が経済成長・経済厚生に与える効果について、個人の現在バイアスの強さがどのように影響するのかを分析する。



## 曲亭馬琴の読本・合巻における演劇利用の研究

研究期間：2018年4月1日～2023年3月31日

文学部 国文学科 准教授 中 尾 和 昇

専門分野：日本近世文学

活用した研究費：科学研究費 若手研究



### 【研究の背景】

曲亭馬琴の作品において、歌舞伎・浄瑠璃などの演劇はハイライトとなるような重要な局面で効果的に発揮され、登場人物の葛藤する心理（＝人情）を浮き彫りにしていることなどから、馬琴の小説作法や小説観に深く関わるものである。そこで本研究は、曲亭馬琴の著述全般を対象として、演劇作品および演劇的趣向の利用実態を分析する。また、兄弟作者と言われる山東京伝の作品との比較をおこなうことで、馬琴の小説作法を多角的・多面的に捉え、その独自性を浮かび上がらせることができると考える。

### 【研究の成果】

具体的な重点課題としては、①「曲亭馬琴の合巻作品の調査・分析および翻刻紹介」②「曲亭馬琴の読本・合巻における演劇作品利用の再検討」③「曲亭馬琴の読本・合巻における演劇的趣向の検討」である。

①は、研究の発展に必要な基礎資料である活字テキストの充実を図るため、各地に所蔵されている作品の諸本調査を実施し、各年度ごとに翻刻紹介をおこなうものである。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大が続き、調査を進めることができなかった。なお、蓬左文庫が所蔵する馬琴合巻『敵討身代利名号』（文化5年〔1808〕刊）後編（前年度調査済）について、『敵討身代利名号』－翻刻と解題－（下）と題して翻刻紹介をおこなった（『奈良大学紀要』50）。

②は、読本・合巻で利用される演劇作品に関して、物語の展開や登場人物の描かれ方などに焦点を絞って検証するものである。今年度は〈小糸・佐七もの〉の浄瑠璃『糸桜本町育』（安永6年〔1777〕初演）を典拠とする京伝・馬琴作品の比較をおこない、論文化する予定であったが、十返舎一九の合巻作品も含めて検討する必要があるため、次年度に見送ることとした。

③は、読本・合巻で馬琴が利用する演劇的趣向に関して、その利用実態を解明するものである。

今年度は、「『血合わせ』再考－京伝・馬琴の諸作品をめぐって－」と題する論考（『読本研究新集』13）をまとめた。

### 【今後の計画（または展望）】

今年度の調査・研究を活かし、次年度は3点の重点課題を計画的におこなうことを目標とする。

①については、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえつつ、まずは2019年度に半数まで調査を終えている東京都立中央図書館での調査を完了させる。そのうえで、関西圏（天理大学・関西大学など）での調査を進めていく予定である。また、今年度は、『安達原秋二色樹』前編（文政3年〔1820〕刊）の翻刻紹介もおこなう。

②に関しては、昨年度進められなかった〈小糸・佐七もの〉の浄瑠璃『糸桜本町育』（安永6年〔1777〕初演）を典拠とする京伝合巻『糸桜本朝文粹』（文化7年〔1810〕刊）・馬琴読本『糸桜春蝶奇縁』（同9年〔1812〕刊）・一九合巻『東男連理緒』（同6年〔1809〕刊）の作品比較をおこない、論文化する予定である。

③については、大蛇（蟒蛇）の怪異を用いた馬琴・京伝等の読本・合巻作品を比較・検討したうえで、趣向の共有が認められることを明らかにし、論文化する予定である。



『敵討身代利名号』後編（名古屋市蓬左文庫所蔵）



## 3Dデータを利用した東アジアにおける文化遺産の保存と活用

研究期間：2020年4月1日～2025年3月31日

文学部 文化財学科 教授 今津 節生

専門分野：文化財科学、保存科学

活用した研究費：科学研究費 国際共同研究強化(B)



### 【研究の背景】

新型コロナウイルスの出現に伴う社会活動の変革によって、文化財に関する調査研究の方法も大きく変わろうとしている。本研究はX線CTスキャナ（以下、X線CT）を使って取得した文化財の3Dデータを3D解析ソフトを使ってWEB上で共有しながら国際共同研究を実施することによって、異なる国や地域の研究者が3Dデータを解析して研究成果を共有することにある。

本研究は、東アジア各国の研究機関がX線CTを使って取得した文化財の3Dデータを共通の3D解析ソフトを使ってWEB上で議論し、その解析結果を共有した上で、最終的に共同で実物調査を実施する。X線CTを使った文化財の調査研究は、欧米ではまだ本格化していないので、東アジア地域の文化財研究者は世界に向けて新しい研究成果を発信できる絶好の機会を得ている状況にある。本研究は、東アジアから世界に向けて、文化財の新しい調査研究方法や保存修復技術を発信することを目的としている。今後、この研究方法是デジタル社会における文化財の新しい研究方法として、文化財の活用を促進する上でも必要不可欠な基礎技術となって世界に普及することが期待できる。

### 【研究の成果】

本研究は急激に変貌する東アジアの中で、文化財を守り・伝え・活用するために各国の文化財科学・保存修復に携わる研究者が、文化財の3Dデータ解析についてWEB会議を中心に研究を実施し、問題点を明確にした上で文化財の所在する現地に集合し、共同で問題解決にあたる研究方法をとる。本研究は国際学会を基盤として活動する。研究成果として、一般市民も参加できるように同時通訳あるいは多言語交流に配慮した国際シンポジウムを開催する。本研究の独創的な研究方法是、X線CTを使った3Dデータを用いて文化財の内部構造・製作技法の研究を通して文化財の保存修復や活用に取り組むことである。この研究方法是、最近15年のうちに日本で実用化され、東アジアに急速に普及しつつある最新の研究方法である。今後、この研究方法是デジタル社会における文化財の活用にとって必要不可欠な基礎技術となり、世界に普及することが期待できる。

研究の具体例を紹介する。脱活乾漆像は塑土で大体の形を造りその表面に麻布を貼り重ね、内部の塑土を除去したうえで木屑というニレの樹皮の粉末による塑形材で造形する。像の内側に塑土の

原型の形状が雌型として残されており、それを3Dプリンターで反転すれば造像当初の原型を再現することができる。しかし、実際には像内には全面に裏打ち布が貼られており、それを取り除かなければ正確な原型の形状は得られない。研究代表者らは既にコンピューター上でX線CTデータ解析・可視化ソフトウェア（VG Studio MAX）を使って3Dレンダリング画像から裏打ち布を除去する技術を開発した。さらに、この技術を簡素化して3Dプリンターで分割して出力したデジタル複製品を使って直接布層を除去する方法を開発した。

### 【今後の計画（または展望）】

これまで日本で積み上げてきた研究方法と研究成果を基礎として、最近5年で急激にX線CTの導入が進んでいる東アジア各国の研究機関や関連学会と連携して先進的な国際共同研究を進める。新型コロナウイルスの感染拡大がまだ沈静化していない状況なので、対面を主体とする現地での研究は実施せず、東アジア三国の研究者とオンラインのWEB会議を中心に研究を進める。来年度にはコロナ禍の状況が好転すると思われるので、来年度に海外の研究者を招聘して国際シンポジウムを開催できるように準備する。

#### 分割した顔の3Dプリンタによる出力



#### VG studio MaxIによる顔のデータ処理





# 古代東アジアにおける彩色顔料の科学的研究

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

文学部 文化財学科 教授 今 津 節 生

専門分野：文化財科学、保存科学

活用した研究費：科学研究費 特別研究員奨励費



## 【研究の背景】

絵画や工芸品などの有機物は歴史の中で朽ち果てるが、鉱物の粉を用いる顔料は遺跡の中で色鮮やかに残る。彩色材料としての顔料は、古代より様々な種類が使用されており、遺跡および遺物の顔料の科学的調査研究は、古代国家間の文化交流を探る鍵となる。モンゴルは、長年に渡る中国との争いと交易、モンゴル帝国の興亡と東西交流など、東アジアの歴史を解明する上で重要な地域である。本研究の基礎となる顔料の科学的研究では非破壊調査や同位体比研究など、これまで日本が東アジアの研究をリードしてきた。本研究にモンゴルの草原地帯の発掘調査に同行して試料を採取し日本で分析化学的な調査研究を進める。本研究は、中国・韓国・日本の既存研究を基礎に、モンゴルの発掘調査に参加して試料を採取し、モンゴル国で発見された彩色顔料の同定を通して産地・技術を明らかにすることによって、東アジアの顔料の歴史を解明することを目的としている。

## 【研究の成果】

顔料の移動は古代東アジアの国家間の交流を解明する重要な手段になり得る。顔料は科学的調査と分析により使用状況を推定しなければならない。そのためには他国との比較検証が必須である。本研究は、以下の3つの研究課題の達成により、東アジアの古代顔料の歴史を解明することを研究目的とする。

- ① 東アジアの顔料史に関する既存の研究をまとめることを目標とする。
- ② 現地調査による試料採集、日本の機関における科学的調査を実施することによりモンゴルの顔料史の解明を目指す。
- ③ モンゴル地域の顔料の中には、東アジアの他国の顔料と粒子の形状などの相違点があり、顔料の劣化実験による解明を目標とする。

本研究では、モンゴルをはじめとする東アジア諸国の顔料を総合的に整理することを目指す。この過程で行う埋蔵状態での顔料変質についての実験は、顔料の劣化と実際の分析結果との誤差を縮めるデータベースの蓄積へつながる。

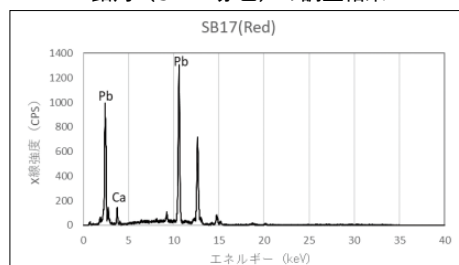
令和3年度は、東アジア諸国における古代顔料についての研究調査を行い、日中韓の古代顔料について先行研究を中心に文献資料をまとめた。古代顔料の試料採取および日本の研究機関での走査型電子顕微鏡（Scanning Electronic Microscope, SEM）、蛍光X線分析（X-ray Fluorescence Analysis, XRF）、X線回折分析（X-ray Diffraction Analysis, XRD）

を用いた科学的調査（成分分析）を行った。現在入手できる顔料（日中韓）を標準試料として顔料の劣化実験を行った。埋蔵環境での顔料の変質傾向を調査するため、試料を土中に埋めて水分と二酸化炭素の影響による変化に注目する。定期的に変質状況をXRF、XRD、SEMを用いて調査した。

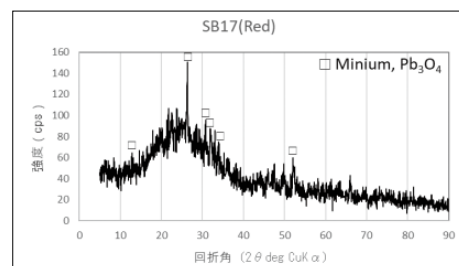
## 【今後の計画（または展望）】

令和4年度には、モンゴル現地調査による古代顔料の試料採取および日本の研究機関でのSEM、XRF、XRDを用いた科学的調査（成分分析）を行う。前年度の試料に対して、定期的に変質状況をXRF、XRD、SEMを用いて調査する。顔料別の変質状態（化学構造および粒子形状の変化）などを整理し、データベースを構築する。また、モンゴルなどで実際発掘した遺物の顔料について、変質可能性を検討する比較資料として活用する。前年度からの研究成果をまとめて、日本の文化財科学会および東アジア文化遺産保存国際学会等で発表する。

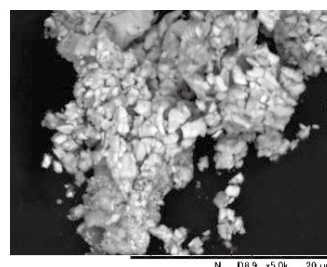
鉛丹（SB17赤色）の調査結果



XRFスペクトル



XRD パターン



SEM画像（5,000倍）



## 奈良県山添村教育委員会との共同事業としての同村所在の歴史史料の調査と保全

研究期間：2020年4月1日～2023年3月31日

文学部 史学科 教授 河内 将 芳

専門分野：日本史学

活用した研究費：奈良大学 特別研究 地域課題解決型プロジェクト



### 【研究の背景】

奈良県山添村は、明治22年（1889）の町村制の施行により成立した東山村・波多野村・豊原村が昭和31年（1956）に合併して成立した村である。現在は、旧村が各地区として独自の文化と歴史史料を伝えている。しかしながら、地区数の多さと広さも手伝って、これまで山添村や地区のほうで本格的な歴史史料の調査・研究はおこなわれてこなかった。そのため、数多くの歴史史料が失われ、また失われつつある状況が続いている。

そのことに危機感をいだいていた山添村教育委員会の井上有貴氏と連絡をとりあっていた関係から、研究代表者は、如上の山添村がかかえる課題を解決すべく、山添村教育委員会との共同事業として、より本格的に調査・研究をすすめることを考えた。

具体的には、史学科教員のなかから共同研究者を募り、また、史学科学生・大学院生のなかからも調査参加者を募り、教育委員会とともに研究チームをつくり、定期的に共同調査・研究をすすめること、そして、それをとおして、歴史史料がそなえる地域性や独自性をうかびあがらせるとともに、地域の人びとに過去から連綿と伝えられてきた郷土の文化に対して再認識してもらいたという思いが本研究を開始するにいたった背景である。

### 【研究の成果】

現地での調査予定は年度内に2回としていたが、新型コロナウイルス感染状況に影響されて1回のみとなった。また、学生の感染を考慮して、教員のみによる調査を実施した。具体的には、2021年2月21・22日である。調査をおこなった古文書は、「下浦家文書」（勝原地区）、「中谷家文書」（勝原地区）、「中西家文書」（上津地区）となる。とくに「中西家文書」には近世文書が含まれ、今回の調査によりさらなる作業の進捗が期待できる。

### 【今後の計画（または展望）】

2022年度も新型コロナウイルス感染対策に十分

注意をはらいつつ、年度内に2度調査を実施する予定である。

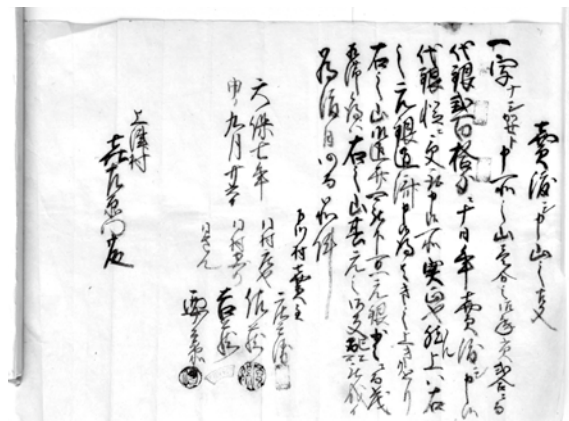


写真4 中西家文書3

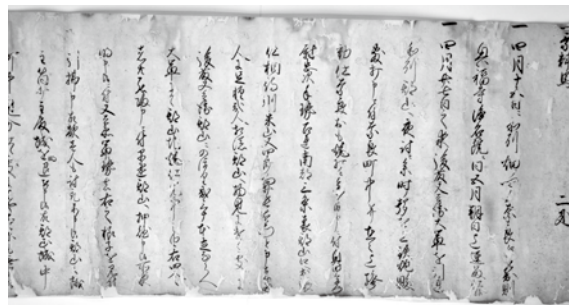


写真5 中西家文書1

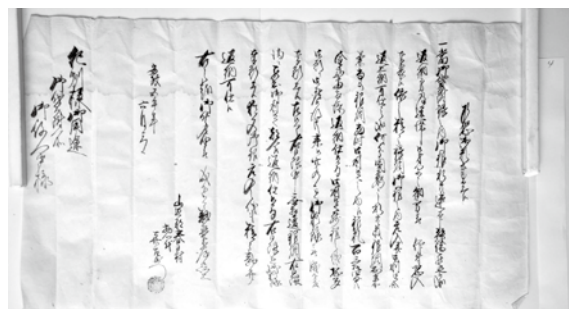


写真6 西家文書2



## 奈良県斑鳩町における古墳の調査研究

研究期間：2020年4月1日～2023年3月31日

文学部 文化財学科 教授 豊島 直博

専門分野：考古学

活用した研究費：奈良大学 特別研究 地域課題解決型プロジェクト



### 【研究の背景】

奈良県斑鳩町は古代の飛鳥から難波に至る経路上に位置しており、藤ノ木古墳や春日古墳、法隆寺や中宮寺など、多くの遺跡が分布する古代史上重要な地域である。斑鳩町には70基以上の古墳が存在するが、発掘調査によって実態が解明された古墳は少ない。斑鳩町教育委員会は7世紀初頭の首長墓である春日古墳の調査を計画しているが、現状の限られた人員と予算では他の古墳の調査は困難な状況である。

奈良大学と斑鳩町は官学連携協定を結んでおり、共同で古墳の学術調査を行ってきた。これまで、斑鳩大塚古墳、寺山古墳群、亀塚古墳、甲塚古墳、梵天山古墳群、神代古墳などの測量調査、斑鳩大塚古墳、甲塚古墳の発掘調査を行い、斑鳩における古墳時代史の解明に取り組んできた。令和3年度は夏期休暇中に寺山北古墳群の測量調査を行い、春期休暇中に戸垣山古墳と舟塚古墳の第1次発掘調査を行った。また、甲塚古墳の第4次調査で出土した遺物の整理作業を行い、発掘調査報告書を刊行した。

### 【研究の成果】

戸垣山古墳は、かつて発掘調査した斑鳩大塚古墳の西約300mに位置する。平成29年8月に、斑鳩町と奈良大学文学部文化財学科が共同で測量調査を実施した結果、南北19m×東西17m程度の方墳である可能性が高まった。発掘調査は今回が初めてである。調査では、古墳の中心を通る十字の調査区を設定した。調査区全体で墳丘盛土を確認し、墳丘の中央付近で埋葬施設と考えられる土坑の一部を確認した。戸垣山古墳が実際に古墳である可能性が高まった。

舟塚古墳は法隆寺参道の駐車場内にあり、墳丘の裾を石垣で囲われた現状で、直径7m程度の円墳状を呈している。詳細な墳丘測量図もなく、出土遺物も伝わっていない。今回は墳丘の測量調査を実施して古墳の現状を記録した後、古墳の基礎的な情報を得るための発掘調査を行った。調査では古墳の中軸を通して南北7m、東西1mの調査区を設定した。調査区内で横穴式石室の一部と考えられる大型の石材を確認し、調査区南端付近で須恵器が出土した。須恵器の出土は周辺に広がる可能性が高いため、今後の調査に備え、取り上げずに埋め戻した。今回の調査で舟塚古墳も古墳で

ある可能性が高まった。

戸垣山古墳では埴輪や土器、舟塚古墳では土器や瓦が多数出土した。発掘調査の終了後、大学に搬入し、遺物整理と報告書作成の作業を継続中である。

### 【今後の計画（または展望）】

戸垣山古墳、舟塚古墳とも埋葬施設と考えられる遺構を確認し、どちらも古墳である可能性が高まった。今後は墳形、墳丘規模、埋葬施設の構造、築造年代などを明らかにするため、引き続き発掘調査する必要がある。

また、平成25～28年度に発掘調査を行った斑鳩大塚古墳について、総括報告書の作成作業を進めている。昭和29年に忠霊塔の建設に伴い発掘調査された際の遺物が、橿原考古学研究所附属博物館に収蔵されている。夏期休暇中にそれらの資料調査を行う予定である。



写真1 戸垣山古墳の調査



写真2 舟塚古墳の調査



## 奈良に関する資料のデジタルアーカイブの構築と活用

研究期間：2019年4月1日～2022年3月31日

文学部 国文学科 教授 光石 亜由美

専門分野：日本近代文学

活用した研究費：奈良大学 特別研究 特設分野研究型プロジェクト



### 【研究の背景】

本研究の目的は、奈良大学図書館に所蔵されている奈良に関する資料をデジタル化し、デジタルアーカイブを構築することである。さらに、インターネットなどで公開し、保存－データ化－公開活用までの一連のシステムを構築することを目的とする。

所蔵されている資料の研究活用にとどまらず、幅広く一般に公開することによって奈良大学の〈知の財産〉を社会還元し、本学の研究成果の広報につなげる。

### 【研究の成果】

昨年に引き続いて、奈良大学図書館所蔵の資料の撮影作業を行った。本年度は主に、①奈良大学図書館蔵「勅撰集 和歌十九代集」の撮影、②北村コレクション大型ガラス乾板の撮影、③御陵写真のガラス乾板の撮影、④北村コレクションのSPレコードの清掃と保存を行った。

①の「勅撰集 和歌十九代集」は、古今和歌集、新古今和歌集などの勅撰集の写本であり、一丁ずつ撮影を行った。なお、三宅教授により10～12月にこの勅撰集を含む図書館展示が行われた。②北村コレクション大型ガラス乾板の撮影については、これまで撮影できなかった大型のガラス乾板(13枚)と、③保存庫に保管されていた御陵写真のガラス乾板の撮影を行った。④については、北村コレクションのSPレコード(282枚)の清掃、データ入力、保存を行った。

いずれも奈良大学所蔵の貴重な資料で、データ化することによって、研究、展示など今後の活用が見込めるものである。

#### 【①勅撰集 和歌十九代集の撮影】

○日程：8月4日(水)、8月5日(木)、8月10日(火)～11日(水)、8月19日(木)～20日(金)、

○作業場所：奈良大学図書館(特別研究室)

○メンバー：野崎和輝(国文学科4回生)、弓場亮輔(国文学科4回生)、光石亜由美(国文学科・教員)、三宅晶子(国文学科・教員)、堀内保彦(NPO法人フィールド)、谷口凜(京都大学大学院)

#### 【②北村コレクション大型ガラス乾板・③御陵写真のガラス乾板の撮影】

○日程：8月30日(月)～9月3日(金)

○作業場所：奈良大学図書館(特別研究室)

○メンバー：長壁志門(地理学科2回生)、矢野智基(地理学科2回生)、芝田篤紀(地理学科・教員)、堀内保彦(NPO法人フィールド)、谷口凜(京都大学大学院)、杉林真樹子(池田市

立歴史民族資料館・学芸員)

#### 【④北村コレクションのSPレコードの清掃と保存】

○日程：2月25日(金)、2月26日(土)、3月1日(火)

○作業場所：国文学科 共同研究室

○メンバー：上島葵衣(国文学科3回生)、小澤壮一郎(国文学科3回生)、鳥居真奈(国文学科3回生)、光石亜由美(国文学科・教員)

#### 【今後の計画(または展望)】

2022年度は特別研究の延長が認められたので、この3年間の成果として、1) 博物館展示「古写真のなかの風景—奈良大学蔵ガラス乾板写真」(仮題)を実施する予定である。2) インターネット公開にむけて、よりアクセスのしやすいシステム環境を構築することを予定している。また、Japan Searchとの連携など国内外への情報発信も視野に入りたい。

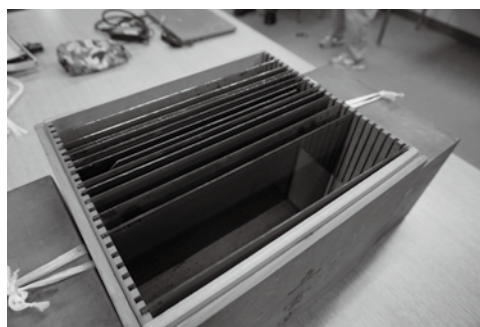


写真1 御陵写真の大型ガラス乾板



写真2 撮影風景



写真3 SPレコード清掃・保存の作業風景







奈良大学総合研究所  
令和3年度

# 活 動 録



## 奈良大学令和館講座

主催：奈良大学

「奈良大学令和館講座」は、地域社会のための生涯学習の場として大学創立50周年を記念して令和元年度に竣工した「令和館」を会場に開催する予定でした。コロナ禍のため、残念ながら対面での開催ができなかったものの、学びを続けたいという人々の意欲にお応えするため、令和3年度は動画配信により、以下の通り本学の特色を生かした多様な内容の講座を開催いたしました。入力フォームへの登録制（無料）のため、受講者数は対面の場合には及びませんが、反面、本学近隣はもとより全国各地で、幅広い世代の方が、時間にとらわれず各自のペースで受講されました。期せずして、本学の公開講座のスタイルに新たな選択肢が生まれました。

### 第1回

日 時：令和3年8月5日（木）～令和3年11月5日（金）  
演 題：「拓本でみる大和古寺の国宝・重要文化財」 奈良大学博物館企画展「東大寺龍松院 筒井家所蔵拓本展」より  
講 演 者：文学部 文化財学科 教授 関根 俊一  
受講者数：142人

### 第2回

日 時：令和3年9月1日（水）～令和3年11月30日（火）  
演 題：地下の正倉院－平城宮跡とその時代  
講 師：文学部 史学科 教授 渡辺 晃宏  
受講者数：122人

### 第3回

日 時：令和3年10月11日（日）～令和4年1月11日（火）  
演 題：大和を舞台とした能－竜田山を越えて行く業平  
講 師：文学部 国文学科 教授 三宅 晶子  
受講者数：67人

### 第4回

日 時：令和3年10月18日（月）～令和4年1月18日（火）  
演 題：スーパーエイジングの主演として生きるために 超高齢社会を華麗に生きるための対人関係  
講 師：社会学部 心理学科 教授 太田 仁  
受講者数：31人

### 第5回

日 時：令和3年11月1日（月）～令和3年11月30日（火）  
演 題：第73回正倉院展のみどころ  
講 師：文学部 文化財学科 教授 関根 俊一  
受講者数：76人



### 特別編

日 時：令和3年11月15日（月）～令和3年12月15日（水）  
演 題：狂言を通して見えてくる日本人の和らい（国文学科特別講義）  
講 師：大蔵流狂言師 茂山 千三郎氏／（司会）文学部 国文学科 教授 三宅 晶子  
受講者数：23人

### 第6回

日 時：令和3年11月29日（月）～令和4年2月28日（月）  
演 題：夢はなんのために見るのか  
講 師：元社会学部 心理学科教授 特別研究員 新宮 一成氏  
受講者数：52人

### 第7回

日 時：令和3年12月24日（金）～令和4年6月30日（木）  
演 題：臨床心理学入門－専門性と社会への貢献－  
講 師：社会学部 心理学科 教授 井村 修  
受講者数：62人

### 第8回

日 時：令和4年2月3日（木）～令和4年4月27日（水）  
演 題：対談 コロナ禍の今～生命・地球・祈りとは  
講 師：東大寺長老 筒井 寛昭師／副学長 社会学部 総合社会学科 教授 島本 太香子  
受講者数：53人

### 第9回

日 時：令和4年2月18日（金）～令和4年5月18日（水）  
演 題：個人的行動の集積による『まちづくり』  
講 師：社会学部 総合社会学科 教授 中原 洪二郎  
受講者数：25人

### 第10回

日 時：令和4年3月11日（金）～令和4年6月10日（金）  
演 題：昭和戦前・戦時期における奈良の観光振興の姿  
講 師：文学部 史学科 准教授 森川 正則  
受講者数：71人



## 奈良大学と斎宮歴史博物館（三重県多気郡明和町）の連携公開講座

テーマ：飛鳥の王宮・王都と伊勢斎宮

主催：奈良大学・三重県立斎宮歴史博物館

日 時：令和4年3月5日（土）  
場 所：本学C302教室（コロナ禍のためオンライン形式で配信して開催）  
講 師：斎宮歴史博物館 主査 川部 浩司氏  
奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員 鈴木 一議氏  
文学部 文化財学科 准教授 相原 嘉之  
受講者数：120名

## 第12回 奈良大学公開講座「夏の夜話2021」

テーマ：コロナ禍の心理と行動

会 場：奈良市中部公民館

主催：奈良大学・公益財団法人奈良市生涯学習財団（中部公民館）

日 時：令和3年7月2日（金）18：00～19：30  
演 題：消費行動からみたコロナ禍における人々の心理  
講 師：社会学部 心理学科 教授 與久田 巖  
受講者数：51名

日 時：令和3年7月9日（金）18：00～19：30  
演 題：食の問題を考える  
講 師：社会学部 総合社会学科 教授 領内 修  
受講者数：45名

日 時：令和3年7月16日（金）18：00～19：30  
演 題：コロナ禍におけるメンタルヘルス  
講 師：社会学部 心理学科 教授 武本 一美  
受講者数：44名



# 第39回せいぶ市民カレッジ奈良大学文化講座

テーマ：飛鳥

会場：奈良市西部公民館 学園前ホール

主催：奈良大学・公益財団法人 奈良市生涯学習財団（西部公民館）・日本環境マネジメント株式会社

## 第1回

日時：令和3年8月5日（木）10：00～11：30

演題：日本の木簡とそのはじまり—飛鳥時代の木簡—

講演者：文学部 史学科 教授 渡辺 晃宏

受講者数：124人

## 第2回

日時：令和3年8月6日（金）10：00～11：30

演題：飛鳥の王宮構造から読み解く古代天皇の実像

講演者：奈良県立橿原 考古学研究所 主任研究員 重見 泰氏

受講者数：125人

## 第3回

日時：令和3年8月7日（土）10：00～11：30

演題：幻の大寺 高市大寺を探る

講演者：文学部 文化財学科 准教授 相原 嘉之

受講者数：117人

## <産学連携事業>

# 奈良大学・公益財団法人 古都飛鳥保存財団連携イベント

テーマ：飛鳥京から平城京を辿る

Part1 飛鳥京周辺を歩く

主催：奈良大学・公益財団法人古都飛鳥保存財団

日時：令和3年10月16日（土）9：40～15：20

コース：飛鳥駅～吉備姫王墓～欽明天皇陵～カナヅカ古墳～鬼の俎板・雪隠～天武・持統天皇陵～亀石～川原寺跡～飛鳥宮跡（昼食）～酒船石～亀形石造物～飛鳥寺～飛鳥水落遺跡～飛鳥資料館（全行程約7km）

講師：文学部 文化財学科 准教授 相原 嘉之

受講者数：30人

天候：快晴





# 近鉄文化サロン 奈良大学 近鉄百貨店共催講座

テーマ：奈良の歴史再発見

会場：あべの a n d

主催：奈良大学・近鉄百貨店

## 第1回

日時：令和3年10月16日（土）13：30～15：00

演題：正倉院宝物にみる仏教美術

講師：元本学教授 元正倉院事務所長 三宅 久雄氏

受講者数：23名

## 第2回

日時：令和3年11月20日（土）13：30～15：00

演題：中国三大石窟と日本古代の仏教美術

講師：文学部 文化財学科 教授 岡田 健

受講者数：21名

## 第3回

日時：令和3年12月25日（土）13：30～15：00

演題：仏像の健康診断から解き明かす技と願い

講師：文学部 文化財学科 教授 今津 節生

受講者数：13名

## 第4回 コロナ禍で中止に

日時：令和4年2月19日（土）13：30～15：00

演題：奈良にゆかりの絵巻と掛幅－女性の信仰を中心に－

講師：文学部 文化財学科 教授 原口 志津子



# 地域臨床実践研究会 活動報告

社会学部心理学科 礒 部 美也子  
林 郷 子

## 研究会の目的・活動内容

ボランティア活動は、学生にとって重要な学びの機会であり、多くの方々と関わることを通して自己の存在を確かめ、将来の進路にも影響を及ぼす貴重な体験である。

本研究会は、学生が地域とつながり、ボランティア活動の意義と魅力を知り、自らボランティア活動をしていこうという意欲を推進することを目的としている。

活動としては、以下3つの柱で成り立っている。

- ① 学生が社会的活動やボランティア活動などに参加した体験を報告し合ったり、外部講師を招いて学習する実践研究会
- ② ボランティアに関連する施設を実際に訪問し、見学や参加観察する。そして、スタッフより現場の実情と課題を聞くことを通して、体験的に現場を理解する活動
- ③ 障害がある子ども達を大学に招待して一緒に遊ぶという企画・実践をする地域活動(通称:ならぼー) 特にこの「ならぼー」は、本研究会主催のボランティア活動であり、企画から当日の運営まで学生主体で行っていて、本研究会の中心的な活動となっている。

これらの活動を通して、他者理解や自己理解を深め、そして自らの成長も実感できること、および講義等で得た知識を体験の伴った生きた知識として根づかせられることなどが、これまでの成果としてあげられる。特に、学生自身がイベントの企画・運営をすることを通して企画力や発信力が磨かれ、主体性や積極性、協調性を養う機会ともなってきた。

しかし、誠に残念ながら新型コロナ禍による対面授業、課外活動の中止により、本活動も自粛となった。

2021年度も2020年度に引き続き実施が叶わなかったが、以下のような活動計画を立てていたので紹介する。

## 2021年度活動計画案

- |     |     |                                     |
|-----|-----|-------------------------------------|
| 第1回 | 5月  | メンバー募集、研究会の活動紹介 ボランティア先の紹介          |
| 第2回 | 6月  | 「ならぼー」の活動紹介と企画考案                    |
| 第3回 | 7月  | 「ならぼー」の活動準備                         |
| 第4回 | 8月  | 「ならぼー」(発達にハンディのある子どもおよびその家族との交流会)実施 |
| 第5回 | 9月  | 講師を招いてボランティア活動について学ぶ                |
| 第6回 | 11月 | 学生のボランティア活動実践報告・交流会                 |
| 第7回 | 12月 | グループエンカウンター体験                       |
| 第8回 | 2月  | 施設見学会                               |

※次年度は、ぜひ地域臨床に関心のある学生同士の交流を実施したいところである。





# 総合研究所報

第 31 号

---

令和 4 年 10 月発行  
(OCTOBER 2022)

発 行 奈良大学総合研究所

〒631-8502 奈良市山陵町1500 TEL 0742(41)9508

---

印 刷 共同精版印刷株式会社

〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6 TEL 0742(33)1221(代)

---

